

未来につなぐ！わかばのポケット ～夢があふれるこども園～

< 2年次 研究報告 >

八尾市立東山本わかばこども園



令和5年2月
八尾市
八尾市教育委員会

目 次

第1章 研究について

1. 研究テーマについて	1
(1) 1年次の研究成果と園の実態・そこから見える課題	1
(2) 研究に向けての考え方	1
2. 研究方法	3
(1) 園内研究会	4
(2) 事例研究会	4
(3) 園内学習会	5
3. 研究実績一覧	6
(1) 園内研究会	6
(2) 事例研究会	6
(3) 園内学習会	6

第2章 各学年の取り組み

1. 0歳児	7
2. 1歳児	13
3. 2歳児	19
4. 3歳児	25
5. 4歳児	31
6. 5歳児	37

第3章 温かいまなざしのその先に ～見方を変えると保育が変わる～

1. 未来につながる子どもたちの力をどのように培うか	43
2. 保育者の資質・能力をどのように培うか	44
3. 研究のおわりに	55



第1章 研究について



第1章 研究について

1. 研究テーマについて

(1) 1年次の研究成果と園の実態・そこから見える課題

研究初年度の学習会において、「めざすこども園」像について考えを出し合った。こども園ではどんなことを実践していきたいかを話し合う中で、「家ではできない経験をいっぱいさせたい」「“やってみよう”が見つけれられるこども園でありたい」「地域・保護者とのつながりを大切にしていきたい」「保育者の役割が重要になってくる」という保育者の思いが見えてきた。これらを踏まえ、子どもたちにどのような力を育てたいのか、それを支える保育者にはどのような資質・能力が必要なのかということを研究し、“未来につながる子どもたちの力”や“保育者の資質・能力”をポケットに詰め込み蓄えていくイメージで研究のテーマを設定し、取り組んできた。

【研究テーマ】 未来につなぐれ！わかばのポケット
～夢があふれるこども園～

1年次は、研究テーマに沿って、各学年で「深めていきたいテーマ」を設定し保育実践に取り組んできた。学年のテーマがあることで、毎日の保育を振り返り次の手立てを考えるカリキュラム・マネジメントや園内研究会、事例研究会、学習会、冊子作成に向けて同じ方向に進むことができた。しかし、園全体の研究テーマである“未来につながる子どもたちの力”や“保育者の資質・能力”をどのように培っていくかということについて追及していくには至らず、課題が残った。また、カリキュラム会議や研究会・学習会を通して、保育を振り返ることができるようになったが、保育の変容の軌跡を記録として蓄積することはできにくかった。保育者からは「話をする時間をもちたい」「時間がとれない」「役割の負担が大きい」など、様々な意見があがった。

(2) 研究に向けての考え方

今年度の研究では、1年次の成果をもとに園全体で研究の視点を明確にし、一人ひとりの保育者の実践が研究につながっているという意識をより高めながら、研究テーマに迫ってみたいと考えた。

子どもたちの実態から、まずは、一人ひとりの姿を「～ができない」ではなく、「〇〇という気持ちの表れである」と肯定的に捉え、そこからどのように環境を整えどのような援助を行えば子どもたちが安心して遊びに向かい、遊びの中で興味・関心を追及していくことができるのかを明確にしていくことにした。その際に、これまで感覚的に捉えてきた環境構成や保育者の援助について具体的に記録し、保育実践における子どもの育ちの可視化に取り組んだ。具体的には、肯定的な見取りを保育の出発点とし、「安心・安全」「トキメキ・ヒラメキ」を子どもの視点・保育者の視点で捉えながらまとめていくことにした。日々の保育でも、園内研究会でも事例研究会でも、この、保育の中で【大切にする3つの視点】(2ページ参照)を基本に保育を考え、保育観察をし、討議を深めることで、“未来につながる子どもたちの力”がどのように育まれてきたか、またそれは、どのような“保育者の資質・能力”によって引き出されたのかが明らかになると考えた。

【大切に3つの視点】

① [保育者] 肯定的な見取りからどのようにアプローチするか

② [子ども] 安心・安全な環境の中ではどのような姿が見られるか

[保育者] 安心感の輪を広げるにはどのような環境や援助が必要か

③ [子ども] 何にトキメキ、何をヒラメいたか

[保育者] どのようにトキメキをつくり出し、どのようにトキメキを支えヒラメキへ導いたか

① 肯定的な見取りからのアプローチ (保育者)

昨年の研究では、子どもの姿から子どもの思いや願いをどのように捉えていくか、どのように見取るかということの大切さを感じた。保育者の見取り方によって一人ひとりの子どもに対する援助の仕方が違っていくことも共有した。子どもの姿をありのままに捉え適切な援助へとつなげていくには、「肯定的な見取り」が必要である。

保育者は、子ども一人ひとりを性格や特性、家庭背景などや生活や遊びの中で見せる子どもの姿から総合的に理解しようとする。しかし、時には「なぜそのような行動をするのか」と理解に悩むこともある。このような時こそ、「本当は困っていることがあるのだけれど、それを素直に表せなくてあんな行動をしているのではないか」などと肯定的な方向で内面を推察し、その子どもの興味・関心を手がかりに、どのような環境を構成し援助をしていくのがよいかを考えながら保育を進めてきた。



② 安心・安全な環境の中で見られる姿 (子ども)

安心感の輪を広げる環境・かかわり (保育者)

どの学年においても「安心・安全」が園生活の基盤になると保育者は感じている。まずは、保育者が「安心・安全」な存在となり、生活や遊び環境づくりにおいても「安心・安全」と感じられる場の構成を心がけてきた。研究を進める中で、生活や遊びの場が「安心・安全」な場であると子ども自身が感じるようになると、少しずつ行動範囲を広げ周りの人やものにかかわっていくようになることが分かってきた。

保育者は「安心・安全」な環境の中で自己を発揮して遊ぶ子どもの姿を捉えながら、改めて、どのような遊具や場、雰囲気、保育者の援助が「安心・安全」となるのかを考えながら保育を進めてきた。

③ 何にトキメキ?何をヒラメいた? (子どもの姿)

どのようにトキメキを支えヒラメキへ導いたのか (保育者)

1つのことやものに集中している子どもが心の中で感じていることを「トキメキ」と表現している。トキメキは、「やりたい・楽しい・おもしろい」という気持ちや「なぜだろう・不

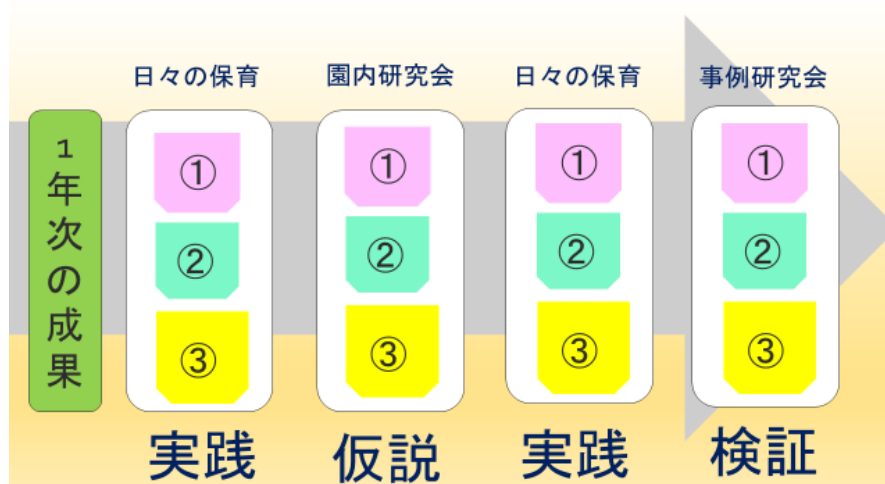
思議だな」といった心の動き、「こうしたい」という意思などであると考えられる。また、集中して遊んでいる子どもが少し違う遊び方を始めることがある。それを「ヒラメキ」と捉えている。ヒラメキは、「こうしてみたらどうだろう」という思考の過程や「こうやって遊ぶともっとおもしろいかな」というイメージ、「こっちはさっきと違うなあ」という判断などであると考えている。

子どもたちは遊びの中で様々なことやものに「トキメキ」そこから何かを「ヒラメキ」、その繰り返しの中で、気づいたり発見したり、分かったりできるようになったりしながら、“未来につながる子どもたちの力”を獲得していく。そのためには、保育者がどのように「トキメキ」につながる出会いを環境として構成し、「ヒラメキ」へつながる援助をしていくかが、重要になっていく。日々の保育実践をこれらの視点で捉えながら、子どもの豊かな育ちを支える保育者の援助の在り方について研究を進めてきた。



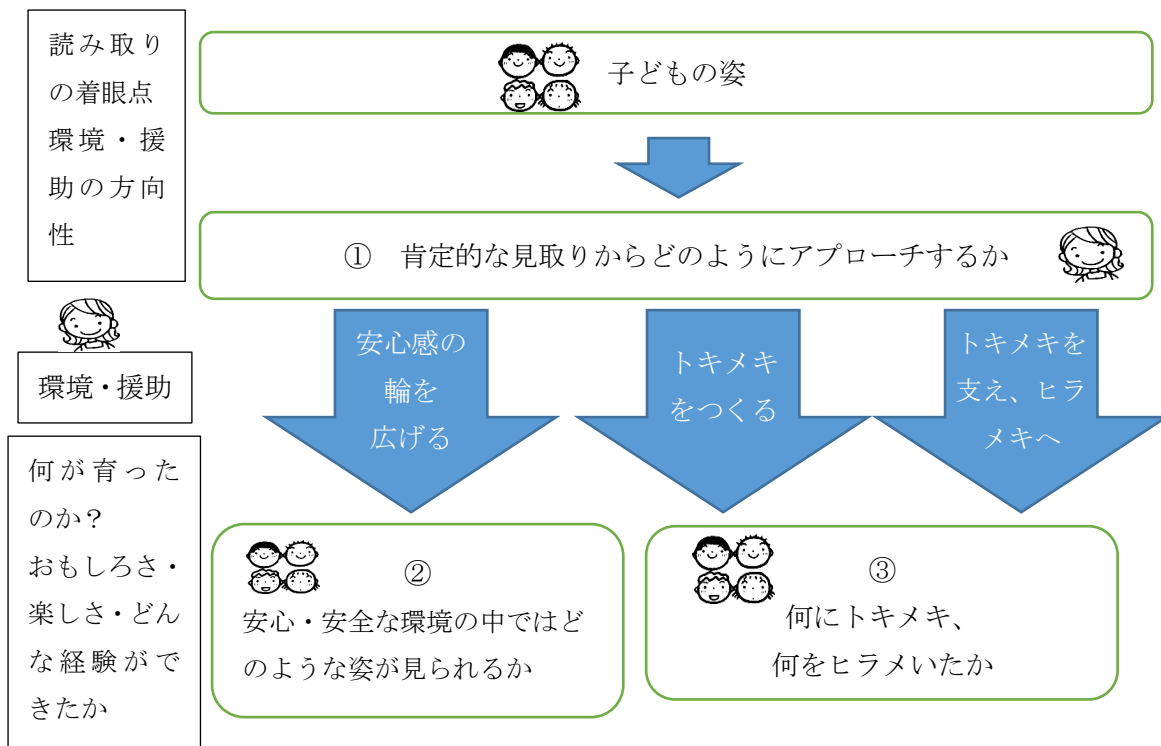
2. 研究方法

今年度は、1年次の成果をもとにさらに保育実践を積み重ねる。その際、それぞれが保育の中で【大切にしている3つの視点】で保育を見直し、一人ひとりの子どもを捉えながら必要な環境や援助を行う。園内研究会や事例研究会では、保育者が捉えた子どもの姿に沿った環境や援助とその中で育つ子どもの姿を見取りながら、保育者の考えや実践（仮説）が適切であったか、子どもの育ちを見通すことでさらにどのような実践が必要となってくるかを検証し、保育者の資質・能力の向上に努める。



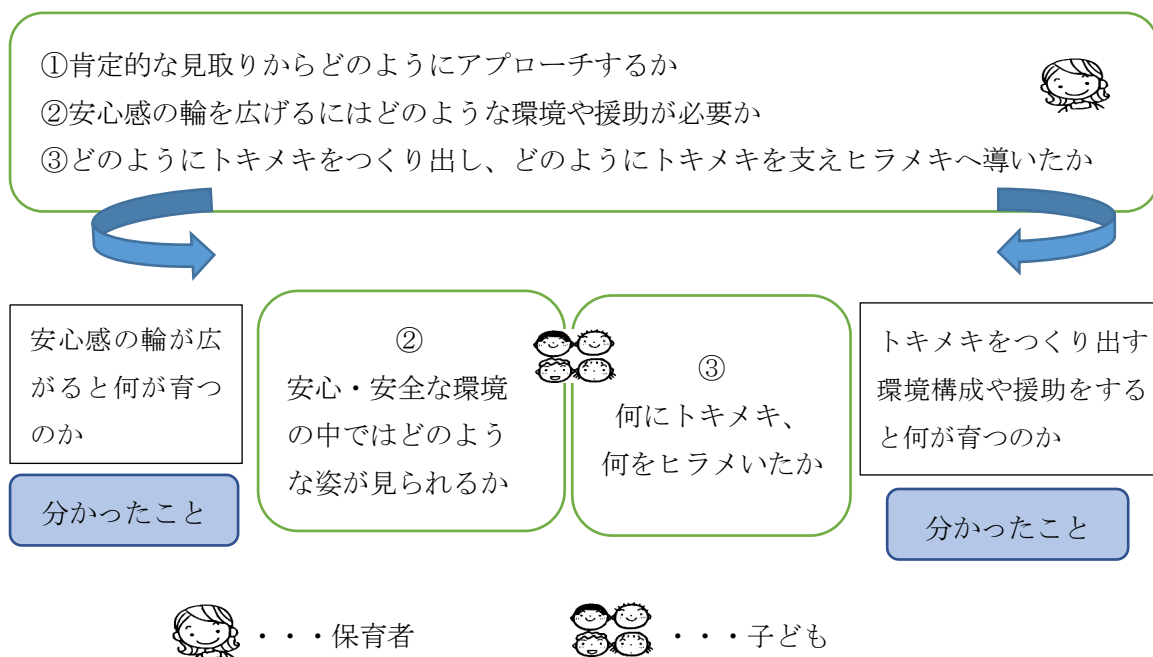
(1) 園内研究会

「研究テーマ」に沿った学年ごとの仮説に基づき、参加者は【大切にしている3つの視点】で観察シートを用いて記録を取る。その後、グループに分かれて討議を行い、考えを整理しながら共有したことを、日々の実践へと返す。



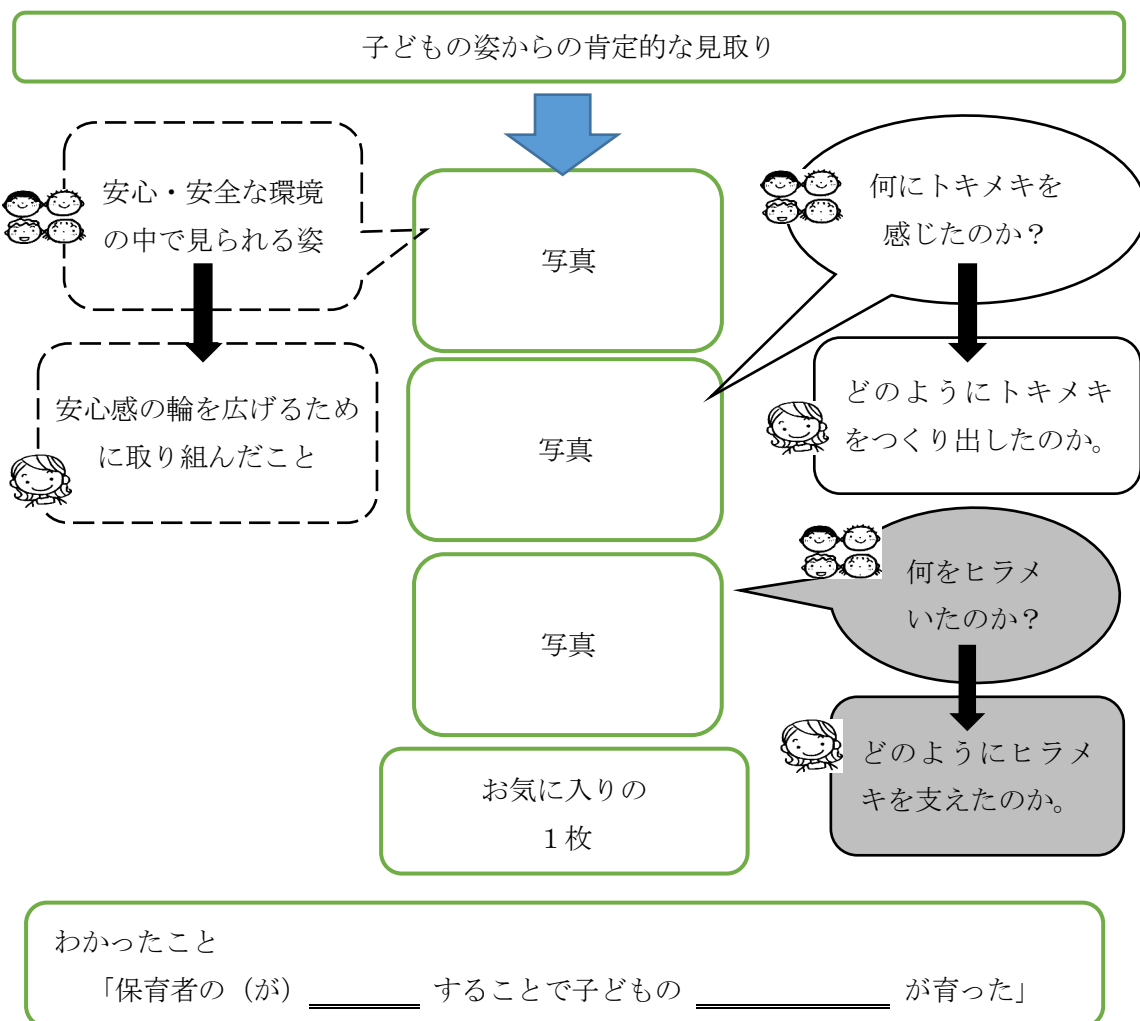
(2) 事例研究会

園内研究会で明らかになったことを園内研究会後の保育の中で実践する。その取り組みの成果を事例研究シートにまとめて提案し、子どもの育ちや保育者の援助などについて討議を深め、検証を行う。



以下の流れで事例研究会を行なった。

- ①提案者は、「お気に入りの1枚」に至るまでの遊びの過程が分かる写真を数枚用意し、下の事例研究シートへ記録や考えを記入する。写真の枚数に制限は設けない。



- ②写真とコメントから、参加者は自分の見取りを「安心・安全」「トキメキ」「ヒラメキ」「環境構成・保育者の援助」の視点で出し合う。

（付箋 安心・安全…水色 トキメキ…ピンク ヒラメキ…黄色）

- ③どんな気づきや学び・育ちが読み取れるのかを整理していき、事例から分かることを参加者同士で共有する。そして、「保育者の（が） _____ することで子どもの _____ が育った」と明確化し、今後の保育に生かす。

☆トキメキ＝やりたい気持ち・楽しさ・おもしろさ・心の動き・こうしたいという思いなど
ヒラメキ＝思考の過程・イメージ・判断など

（３）園内学習会

園内研究会での様子やグループ討議を通して分かったこと、指導助言の内容を報告し、学年毎に【大切にする３つの視点】で保育の振り返りを行う機会とした。また、研究冊子の作成に向けての話し合いや研究発表のパワーポイントの作成など、自分の保育を広く発信して

いくツールづくりも行う。また、「わかば研究会 News」を作成し、今年度の研究の進め方や【大切にしている3つの視点】、園内研究会の様子、研究の中で明らかになったことが共有できるように、学習会や学年代表者会議で配付する。

3. 研究実績一覧

(1) 園内研究会

日 付	学 年	討 議 の 柱
5 月 23 日 (月)	5 歳児	肯定的な見取りから一人ひとりが安心して遊ぶ環境づくりへ
	4 歳児	
6 月 30 日 (木)	3 歳児	
	1 歳児	
9 月 26 日 (月)	2 歳児	
	0 歳児	
2 月 8 日 (水)	全学年	

※指導講評・講演 大阪総合保育大学 教授 瀧川光治さん

(2) 事例研究会

日 付	学 年	討 議 の 柱
7 月 19 日 (火)	5 歳児	肯定的な見取りから一人ひとりが安心して遊ぶ環境づくりへ
	4 歳児	
8 月 9 日 (火)	3 歳児	
	1 歳児	
11 月 10 日 (木)	2 歳児	
	0 歳児	

(3) 園内学習会

日 付	内 容
4 月 21 日 (木)	今年度の研究について
5 月 26 日 (木)	園内研究会（5 月）での学びの共有（動画）
7 月 26 日 (火)	園内研究会（6 月）での学びの共有
9 月 29 日 (木)	園内研究会（9 月）での学びの共有・研究冊子の内容について
11 月 24 日 (木)	研究冊子の内容について
12 月 27 日 (火)	研究発表の内容について
1 月 26 日 (木)	研究発表の内容の共有と 2 月 8 日の公開保育に向けて
2 月 27 日 (月)	次年度へ課題整理



第2章 各学年の取り組み



第2章 各学年の取り組み

1. 0歳児

【4月の子どもの姿】

入園当初は、母子分離の際に泣いたり、お家の人以外には抱っこされることを嫌がったり、お腹が空いたり眠たくなったりして常に誰かが泣いていた。また、保育者が安心できる存在と分かるまで、ミルクを飲んだり離乳食を食べたりしない姿が見られ、眠りが浅く眠りについてもすぐに起きて泣いている子どももいた。まるで『ここはどこ?』『あなたはだあれ?』『安心できるの?』と訴えているように感じた。しかし、9名全員が出席する日は少なく、少人数で生活することが多かったので、一人ひとりに丁寧にかかわることができ、いつまでも泣き続けるということとはなかった。

保育者は、マスクで表情を見せられないが、やわらかい声のトーンや温かなスキンシップを大切にしながら、食事・排泄・睡眠など、子ども一人ひとりの生理的要求を丁寧に受けとめ、かかわるようにしてきた。すると次第に、保育者と目が合うと笑う姿や、泣いている他児の頭をなでたり、保育者のマスクを外そうとしたりするなど、自らかかわろうとする姿が見られるようになってきた。担任の声や顔を覚え始め、どの担任でも欲求を満たしてもらえることが分かってきたので、ホッと気持ちが落ち着く時間が増え、不安の解消につながっていった。

こども園が、家庭以外で安心して楽しく過ごせる場所だと認識すると、側にある玩具に興味をもち、手で触ったり口に入れたりするようになってきた。また、ボールを転がしハイハイや高這いで追いかけたり、つかまり立ちをして喜んだり、全身を使って鈴を鳴らしたりする姿も見られるようになった。

【①肯定的な見取りからのアプローチ：9月】

生活リズムの違いや月齢差はあるものの、朝寝をする子どもが減り、日中起きている時間が長くなると、自分から玩具を触ったり触れようとしたりする姿が多く見られるようになってきた。戸外に出て砂遊びや滑り台を楽しんだり、車に乗って散歩にでかけたりするなど活動の場が広がっている。また歩き始めたり、ずり這いやハイハイ、つかまり立ちに挑戦したりする姿も見られるようになっている。しかし、動きが活発になるにつれて遊びの場が手狭になり、4月当初から用意している玩具には物足りなさを感じているように見えた。

さらに、月齢の高い子どもたちには楽しい遊びでも月齢の低い子どもたちにとっては危険な遊びになってしまうことがあり、月齢の差を考慮しながら一人ひとりの遊びを保障するにはどうしたらよいのか深く考えるきっかけとなった。

そこで“ひよこ組の保育室大改造計画”を実行し、子どもの興味・関心や動線を考えながら遊びの場や玩具の見直しを行った。また、安心・安全な遊び環境から“ドキメキいっぱいの遊び”に変化できるように、子どもたち一人ひとりが「今何に興味をもち、楽しんでいるのか?」同じ玩具でも「どんな楽しみ方をしているのか?」などを見取り、今の子どもたちの発達や興味に合った玩具の用意を進めていった。

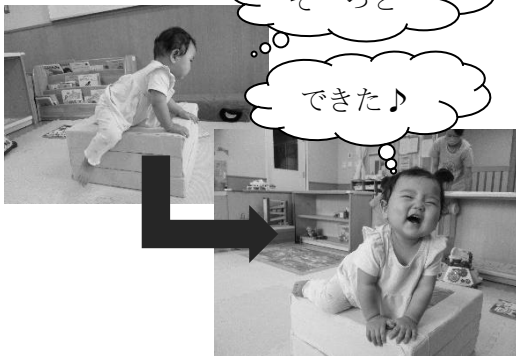
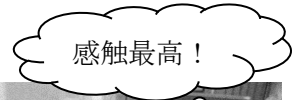
【②安心・安全な環境の中で見られる姿】

○主体的に遊んでいる



『ビリビリ～！！感触最高～！！』

壁面の遊びの1つとしてマジックテープを剥がす遊びを用意したところ、指先を使い1つずつ剥がしてはくっつけるを繰り返し遊ぶ姿が見られた。マジックテープを剥がす際「ビリビリ～！」という音とともに指先から伝わってくる感触にも楽しさを感じているようだ。また、いつも同じ環境の中で、好きな遊びを見つけ遊べるのが安心感につながっている。



『そーっと』

ハイハイやつかまり立ちができるようになり活発に動き回る子どもたち。他児がサークルの中に入り遊ぶ姿をじーっと見つめ“私もやってみる”と挑戦する姿が見られた。片足ずつ慎重に入っていく、中に入ると満面の笑みでできたことを知らせてくれていた。できたことが嬉しく毎日の日課になった。

【安心感の輪を広げる環境・かかわり】

『いっぱい食べてね♡』



保育室の隅で動物がお腹を空かせて、口を開け待っている！！りんごやバナナを置いておくと口の中にポイっと、食べさせてあげる姿が見られた。「もぐもぐしたね♪」「まだお腹空いているみたい」と、1つずつ丁寧に反応し、1対1のかかわりを大切にすることで繰り返して遊ぶことを楽しんでいた。



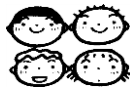
“オノマトペ”を意識した声かけが受容的、共感的、応答的となり、子どもにとっても側にいてくれる安心感につながる

『ばあ～！』

保育者に見つけてもらうことが大好きな子どもたち。「ばあ～！」と、様々な場所から顔を覗かせ保育者の反応を楽しんでいる。子どもの言葉に繰り返し何度も反応を返すことで安心し、自分から遊んだり、友だちにかかわろうとしたりする姿が見られた。



【③何にトキメキ？何をヒラメいた？】



『こねこが にゃあ〜♡』



見つけた♪

子猫がかくれんぼをしている『こねこが にゃあ』の絵本が好
きで、保育者と一緒に繰り返し楽しむ姿が見られたので、絵本
を題材にした遊びを壁面に用意した。保育者が「こねこが…。」
と、言葉をかけると“ここだよ！”と壁に貼られている写真を
めくり子猫を見つけ楽しんでた。

【『こねこが にゃあ』
作：ひろの たかこ 福音館書店】

手を伸ばすと届く位置に興味をもちそうな玩具を用意したことで、自分から玩具に触れに
行こうとする姿が見られた。偶然の働きかけが“トキメキ”“ヒラメキ”につながるよう
な、遊びが見つかる環境がいっぱい！！

発達や興味に合わせ、身近な
ものを使ったビジーボード
(ゴム、紐、鏡など)



保育者や友だちの姿を見て、同じ
ことをやってみようとする



感触や光、感覚、音など
五感を刺激する遊び



音を鳴らす



入れる

同じ玩具でも遊び方が違う
⇒言葉かけが変わる
⇒子どもの姿から次の遊びにつなげていく

【どのようにトキメキをつくり出し、トキメキを支えヒラメキへ導いたか】



○応答的なかわり

保育者が安全基地となり、子ども一人ひとりの行動や表情を読
み取り、丁寧に受けとめながら応答的にかかわることを大切にし
ていることがトキメキを支えている。

○環境の再構成

月齢差に応じた遊びや場所を確保することで、一人ひとりが好
きな遊びを見つけじっくり遊ぶ姿が見られるようになった。一人
ひとりの好きな遊びがある保育室になるよう、発達や興味に合っ
た玩具の用意を進めていった。



○一緒に・繰り返す

子どもと一緒に遊びを楽しみ、時には遊びのモデルとなり、遊
ぼうとする姿を見守りながら、心ゆくまで繰り返し遊ぶことの楽
しさを満足感が味わえるように、保育者を含めた環境づくりを行
った。

◆子どもの姿からの肯定的な見取り

○入園当初は家の人から離れる時に泣いたり、ミルクや食事を食べさせてもらうのを嫌がったりして慣れない環境に敏感に反応していた。「ここはどこ?」「知らない人、だあれ?」「見たことのないもの…こわい」の気持ちでいたのでは?
→穏やかな声で話しかけ、温かな触れ合いを大切にしながら子どもの生理的欲求を常に満たしていくことで、「保育室＝安心して楽しく過ごせる場所」「保育者＝穏やかな気持ちにさせてくれる人、好きな人」と認識してくれるようになった。また笑顔や喃語も出てくるようになった。
○新しい環境に居ることだけで精一杯。朝早い登園や泣いて過ごすことに疲れるので午前中睡眠をとる子どもが多かったが、徐々に生活リズムに慣れ身体も発達してハイハイやつかまり立ち、歩行など自ら動こうとする姿も見られるようになる。
→色々な物を見て興味をもって触れにいき、友だちや保育者にかかわりにいく姿もでてきた。

これは何かな? 中に入れた♪

きれい♪♪

鏡の向こうに誰がいる!

ベッドみたい♪

お家みたいで気持ちいいな

私もやりたいな

ばあっ!

ぶにぶにしておもしろい

引く張ったら音がするんだね!

先生と一緒に駆けそう

ほくも一緒に遊ぼう♪

ププー! 道路みたいだな走らせてみよう♪

- 友だちが入っている姿を見て興味をもち、一緒に入りに行く。場所を独占したいという気持ちも生まれ、取り合いになることもある。その場面では保育者が周りにいる子ども全体に絵本を読みきかせをしたり「ねんね～」と言いながらブランケットを渡したりして遊びを共有し、かかわりをもって遊べるようにする。
- 「子どもが抱いているイメージ＝家の部屋の雰囲気」を大切にし、空間に入って遊びを楽しめるようにした。

- 既存の玩具と行事用につくった環境を合わせて使って遊ぶ姿が見られるようになってきた。「おもしろいね」と共感し一緒に遊びながら存分に楽しめるように見守る。
- 子どもが偶然見つけた遊びや発想を見逃がさず、ともに喜んだり「すごいね」と声をかけたりして繰り返して遊ぶ楽しさも伝えていくようにした。
- 自分で遊びを見つけて触れに行くことができるような環境の配置をした。

わかったこと

「保育者が子どもの安心できる環境をつくることで、子どもが自らやってみようとする気持ちが育った」



安心・安全な環境の中で見られる姿

○おもしろそう！

保育者がいつも見てくれている安心感をもち、「大好きな人が一緒ならやってみよう」とする。友だちが楽しんでいる姿に興味をひかれて「自分もやってみたい、まねしたい」という気持ちが出てきたことで、友だちにかかわりに行く姿も見られる。



安心感の輪を広げる環境・かかわり

○お家以外で安心して楽しく過ごせる場所

保育者や保育室が安心できる存在・場所であることが大切である。常に子どもの欲求や気持ちに寄り添い、穏やかで優しく語りかけながら笑顔で安心感を与えるなどのかかわり方を心がける。また、月齢や発達に合った玩具や環境づくりをし、どの子どもも好きな遊びを見つけて楽しむことができるように環境の再構成を行う。



何にトキメいた？

○色々な感触が心地よい！

センサリーマットやビジーボードなど触れると音の出るもので遊び始める。手だけでなく足や目、耳など全身で感じて楽しめる玩具に興味をもち、自分で触れたり動かしたりして遊ぶことを楽しんでいる。五感を刺激される遊びが楽しい。

○まるでお家みたい！

柵板を外し、家の個室のような雰囲気になったことで、中に入って寝ころびタオルケットなど他の物を持って来て、空間そのものを楽しむ姿がある。



何をヒラメいた？

○これなあに？

近づいてみる、触れてみる、押してみるなどの動きをすることで、偶然発見した玩具の動きや形の変化に喜ぶ。おもしろさを感じ、繰り返して何度もやってみようとする姿が見られる。

○おもしろそう！

以前から遊んでいた車の玩具を手づくりのトンネルまで持って行き、枠に沿って走らせて遊んでいた。道路を走っているイメージが湧いているようだ。友だちがしている姿に魅力を感じ、隣に並んで一緒に楽しむ姿もある。



どのようにトキメキをつくり出しトキメキを支えたのか？

どのようにヒラメキへ導いたか？

○一緒に遊ぶと楽しいな♪

子どもが安心して心地よく過ごせる環境を考え、一人ひとりの発達や動きに合わせた玩具をつくり構成していったことで、子どもの興味や関心が生まれた。子どもがおもしろそうだと感じた姿を見逃がさず遊びに誘ったり一緒に遊んだりしながら、楽しさや喜びを伝え共感するように援助した。

○自分でやってみたい！

子どもたちが自ら動けるようになった時期と、環境を再構成しようとしたタイミングがしっかり合ったことが一番よかったと感じる。その結果、子どもが自らやってみようとする姿が生まれ、好きな遊びを見つけたようにも思う。

【ポケットに入ったもの】



子どもに育った力

- ・色々なものに興味をもち、好きな遊びを見つけて楽しむ。
- ・自ら動こうとする力が身につく。(ハイハイ・つかまり立ち・伝い歩き)
- ・保育者の表情や反応を見て喜び、友だちや友だちのしていることに興味をもつ。
- ・近づいてみる、触ってみる、押してみるなどの動きをして全身で感覚・感触を楽しむ。
- ・意欲的に食べる、遊ぶ、ぐっすり眠るなど生活リズムが身につく。



保育者に必要な力

- ・スキンシップや触れ合いを大切にし、生理的欲求を満たす。
- ・子どもの要求を丁寧に受けとめ共感し、応答的なかわりをする。
- ・子どもの興味・発達に合わせた環境づくりをする。
- ・見通しをもち、発達にあった援助をする。
- ・保護者や家庭と連携して共通の援助方法を考えていく。

【研究の総括】

- ・4月の学習会で子どもの姿を出し合い、“お家以外で安心して楽しく過ごせる場所”をめざそうと職員間で方向性を明確にし、いつも同じ保育者が居て同じ遊びができる家庭的な雰囲気をつくってきた。そして、生理的要求を受けとめながら、一人ひとりの発達に合わせ丁寧にしかかわることが『安心・安全』につながっていくことを再確認した。
- ・園内研究会や事例研究会を行うごとに、ものや人に興味をもち自分からかわり楽しむ力が育っていることを実感した。また子どもたちの姿を見取り保育室の環境や遊びを準備していくことで“トキメキ”“ヒラメキ”をつくり出していることに気づくことができた。
- ・0歳児の子どもたちの姿を見取ることに對して悩んだり不安を感じたりしていたが、瀧川教授より、“くり返し＝予測ができ安心して遊べる”くり返し遊ぶことで「できた」「嬉しい」が、積み重なり“変化”が生まれることを講義の中で教えていただいた。子どもの見取り方や同じ遊びでもどんな遊び方をしているのかによって準備するものが変わることが分かり、日々楽しく保育や環境づくりを進めていけるようになった。

2. 1歳児

【4月の子どもの姿】

新入園児は初めてのこども園の環境に不安を感じ、進級児も新しい保育者と保育室に戸惑っていた。保育者の顔を見ると保護者と離れなければいけないと察知して泣く姿があったが、知っている音楽がかかっているのに気づくと耳を澄ませて泣き止むこともあった。また、家から持ってきた自分のタオルなどを握っていると安心する姿があった。生活のリズムが家とは違うため、午睡ができず泣いたり慣れない環境で座って食事をするのが嫌で立ち上がった子もいた。一方で、揺れているものや転がるもの、回るものに興味を持ち、保育者の膝の上でそれらの玩具に触れていると落ち着いたり、好きな乗り物や動物、食べ物の絵本を見たり、戸外に出ると解放感を感じ、走りまわることによって泣き止む子どももいた。

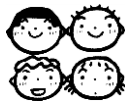
やがて、初めて触れる環境に興味をもち始め、探索活動が始まった。保育者が離れると泣いたり、抱っこを求めたりする姿も見られるようになってきた。同じ保育者とかかわることで気持ちを表出できるようになり、少しずつ安心感、信頼感ができてきた。また、どこまで自分の思いを受けとめてくれるのかを試すように「いや」と言ったり首を振ったりして拒否する姿もあった。月齢の高い子どもは、泣いている他児の顔を覗き込んだり、頭をヨシヨシしたりする姿もあり、保育者や保護者に自分がしてもらったことを友だちにしようとしていた。棚の陰から顔を出したり、向こう側にいる友だちの顔を覗いたりしてかかわろうとする姿もあり、友だちに興味をもち始めた。

【①肯定的な見取りからのアプローチ：6月】

特定の保育者とかかわりを大切に、不安な気持ちを受けとめてきたことで、「この保育者がいれば大丈夫」と泣かずに登園する子どもが増えてきた。午睡時には寄り添い背中をさすることで安心して眠るようになってきたり、保育者が近くにいることで好きな遊びや興味のあるものにかかわろうとしたりする姿も見られるようになった。一方で、玩具棚や机の上に乗ったり、室内を走ったり玩具を投げたりと危険な場面も出てきた。その姿からもっと全身を使って遊びたいのではないかと考えた。4月から、外に出ると解放的で気分が切り替わり泣き止む姿があったので乳児園庭の環境を子どもの姿に合わせて整えた。また食事前や排泄後の手洗いや栽培物の水やりで水を触ることに夢中になり水の感触を楽しむ姿があったので、全身を使って存分に水遊びを楽しめる環境を準備した。

最初は、水を溜めた小さいバケツやタライ、ペットボトル水鉄砲、小さいボトル、水風船などを用意し、少しずつ水に触れられるような玩具を用意した。次第に、自ら水に触れて遊ぶようになってきた姿の変化に合わせて、玩具や素材の種類や数を調整してきた。体や顔が濡れても気にすることなく夢中で遊び込む姿から、もっと全身で水に触れられる遊びを考えた。ウレタンスティックに穴を空けてホースを差し込み穴から水が出るようにして地面に置いておくと、穴を指でふさいだり自分の方に水がかかるように方向を変えたりして遊んでいた。今度は上から吊るしてシャワーのようにすると、手を差し出したりカップで受けたりして遊び始め、徐々に顔を濡らしたりシャワーの下に入り込んで頭から濡れることを楽しんでいた。遊ぶ姿に合わせてシャワーの位置や水の出方を変えてきたことで、全身で水を感じて遊びを楽しむようになってきた。

【②安心・安全な環境の中で見られる姿】



○先生と一緒に

保育者の側に行き見守られる中で、伸び伸びと過ごしている姿があった。保育者を遊びのモデルにして同じように楽しんでいった。

○好きな遊びを楽しむ

タライから離れずに遊び込んでいる子どもが多かった。自分で素材や玩具を選んで手に取ったり、色々なものに自分からかかわろうとしたりしていた。また、園庭の端から端まで走ったり、探索したりする子どももいた。



○生活の流れがいつも同じ

次の活動が分かり、帽子を自分で取りに行っている。保育者から声をかけられると、自分からシャワーに行こうとしていた。

【安心感の輪を広げる環境・かかわり】



○子どもの思いを受けとめる

発語に共感しながら、気持ちや感じたことを言語化する。また、やってみたいという気持ちにも共感し、側で見守る。

緊張がほぐれるよう、子どもが興味をもって遊ぶように誘う。

○子どもが遊びやすい環境

- ・自由に素材や玩具が手に取れる環境
- ・丁度よい数の素材や玩具
- ・ものが多すぎず、すっきりとした園庭
- ・子どもの目線に合わせたタライの配置



○環境の再構成

子どもの遊んでいる様子や発達に合わせて環境を変えていく。水が苦手な子どもが慣れていけるように、はじめは指先で触れる程度の遊びから、だんだんと大胆な遊びへ移行できるようにしていく。

【③何にトキメキ?何をヒラメいた?】



○色々な素材、様々な感触

- ・水の音、動き
- ・水の冷たさ、色
- ・水風船
- ・砂
- ・素材、玩具

○試行

プールのスティックのシャワーを回転させて水の出方を観察したり、シャワーから出ている水を指で押さえて止めてみたりしていた。また、トマトの水やりを使うペットボトルのじょうろを、押してみると水が出たことに喜んでいた。

タライの中に砂を入れてみたり、氷を砂の上に落としてみたりしていた。水風船をスコップですくって水風船の動きを目で追っている子どももいた。



○気づき

素材によって色々な水の出方があることに気づく子どもや、水の中に砂を入れると混ざって色が変わることにも気づき、どんどん砂を入れる子どもの姿があった。また、砂がついた氷を水に入れると砂がとれたことがおもしろく、何度も繰り返していた。氷を持っていると冷たくてずっと持っていられなかったり、溶けてなくなってしまう不思議な顔をしたりしていた。



【どのようにトキメキをつくり出し、トキメキを支えヒラメキへ導いたか】



○環境構成

五感を刺激する素材（氷、水風船など）や、子どもが扱いやすいものを用意する。また色々な形でイメージが膨らみやすいものを用意する。

タライを数個用意して、遊びのスペースが広くとれるようにする。



○保育者の援助

保育者がモデルとなり、実際に楽しそうに遊んでいる姿を見せる。温かいまなざしで見守りながら共感したり気づきを言葉にしたりして子どもの姿や思いを受けとめていく。子どもからの「一緒にやって」という要求に十分に答えるようにする。身近なものや日常の経験が遊びにつながるようにしていく。（トマトの水やり）



◆子どもの姿からの肯定的な見取り

○入園当初は不安が大きく、泣くことで思いを表現していた。

・友だちや保育者がいっぱいいて不安を感じている。 ・新しい環境に慣れず、分からないことがたくさんある。
→保育者が子どもたち一人ひとりの安心基地になれるようにスキンシップをとり、温かいかわりを心がけ、信頼関係を結んできた。

○自分から遊び始めたり、かかわっていったりする姿が少ない。

・触れてみたことがない。 ・遊びたい気持ちになっていないのか。
→子どもを遊びの環境に入れるのではなく、玩具や遊具を子どもの近くに持ってくるようにした。



「こうやってらお水が
出てくるよ」
「先生見てね。
こう？」



「上手に取れた！」
「もう一回！」



- ・新しい玩具や道具は、保育者が使って見せることで使い方を知らせた。自分でやってみたい子どもには、手を添えて使い方のサポートをするようにした。
- ・ペットボトルシャワーでは、子どもたちが水を怖がらないように、まずは足元に水がかかる程度にした。子どもたちの反応を見ながら次は目線の高さへと段階を踏んで徐々に水に慣れ、親しめるようにした。



「水を入れてジャ〜！」
「もう水が出なくなった」
「もう1回やってみよう」

- ・子どもたちの身近にあるもので、関心をもちそうな道具や用具を準備している。
- ・何度も繰り返して遊んでいるときは、静かに見守り、心ゆくまでその遊びを楽しめるようにしている。
- ・遊びの途中で目が合えば、笑顔や言葉を返し「楽しいね」「不思議だね」と気持ちに共感している。



「穴を指で押さえると水が止まるよ」
「揺らすと水がどこにいくかわからない」
「お水の動きがおもしろいな」



- ・子どもたちの水の慣れ具合や遊びの様子を見て環境を再構成した。同じ玩具でも置き方や位置、高さを変えてみて、遊び方に変化が生まれるように工夫した。
- ・子どものイメージがより広がるように食紅やクレヨン紙を使って水に色をつけている。



「このお水の色
きれいだな」
「コップに入れてみよう」



「スコップにお水を入れて
みよう」
「ペットボトルにも入
るかな？」



わかったこと

「保育者が子どもの姿を見取ったことで、子どもの意欲が育った」



安心・安全な環境の中で見られる姿

○先生と一緒に

すぐ近くに保育者がいることで安心でき、「やってみたい」と気持ちが動くきっかけになった。

○繰り返し

遊び慣れた場所に親しみのある道具や玩具があることで、自分から好きな遊びを見つけに行くようになった。



安心感の輪を広げる環境・かかわり

○年齢や発達に合った

子どもたちの身近にある関心をもちそうな道具や用具を準備することが大切である。新しい道具は保育者が使って見せたり、手を添えたりして自分で使えるようにサポートした。また、保育者が一緒に遊び、水の心地よさやおもしろさを伝えることで、遊びへの意欲につながるように援助した。



何にトキメいた？

○感触や不思議さを楽しむ

食紅で水に色をつけたことで、「なにこれ？」「触ってみたい」と子どもたちの好奇心が高まり、色水に触れようと手を伸ばしていた。ウレタンチューブのシャワーでは、穴から飛び出す水の勢いや細かい水しぶきなどに興味をもち、見たり、触ったりしているうちに服や顔が濡れることも構わず、全身で水の感触を楽しんでいた。



何をヒラメいた？

○経験からの見立て遊び

色水をコップに入れることで『ジュース』と身近な経験に見立て、イメージを膨らませて遊ぶようになった。

○考えて遊ぶ

容器に水を入れたり出したりを何度も繰り返すうちに、「次はこうやってみよう」「次はどうなるかな？」など、集中したり思考を巡らせたりして遊ぶ姿が見られた。



どのようにトキメキをつくり出しトキメキを支えたのか？

どのようにヒラメキへ導いたか？

○視覚から興味を誘う環境、年齢や発達に合った扱いやすい用具や道具を準備するようにした。手足が濡れる程度の遊びから徐々にダイナミックな遊びへと環境に変化をつけ、段階を踏んで遊びを楽しんでいけるように工夫した。また、一人ひとりの遊び方を肯定的に捉え、子どもたちが夢中になって遊んでいる時には見守り、目が合えば笑顔や言葉を返し「不思議だね」「おもしろいね」など気持ちに共感するかかわりを大切にした。

【ポケットに入ったもの】



子どもに育った力

- ・ 家族以外の人と、心を開いてかかわろうとする。
- ・ 園生活や保育者に慣れたことで、安心して自己表現できるようになる。
- ・ 日々の経験の積み重ねや、自分でやりたいという気持ちの育ちから、身の回りのことを自分でしようとする。
- ・ 様々な遊びを通して、五感を使いながら自ら試行錯誤して遊ぶ。
- ・ 四季に応じた自然物や事象から、違いや変化に気づく。



保育者に必要な力

- ・ 温かなかかわりをすることで、子どもの安心感につなげられる。
- ・ 子どもの表情や仕草、つぶやきなどから子どもの気持ちを読み取る。
- ・ 子どもの興味・関心を把握し、環境構成に取り入れ、遊びの展開を広げる。
- ・ 子どもの目線に合わせて、共感しながら思いを受けとめたり、寄り添ったりする。
- ・ イヤイヤ期に入った子どもたちの心情を受けとめたり、見守ったり、時には楽しい方向へと子どもの気持ちを動かすような働きかけをする。

【研究の総括】

園内研究会、事例研究会を通して、保育者同士で日々の子どもたちの姿や成長の様子、環境構成や援助の方法を話し合うことで、自分一人では気づくことができなかった子どもの見取り方などを知ることができた。「研究」に難しさを感じていたが、普段の保育を一つ一つ読み解くことで、今までの子どもとのかかわり方や保育の方向性が間違いではなかったと再確認する機会にもなった。また、子ども一人ひとりの家庭背景の理解に努めたり、援助の方向性などを保育者間で共有したりすることにより、日々、子どもたちとかかわる複数の保育者が、子どもたちが安定した気持ちで過ごせるように配慮しながらかかわるようになった。

今年度の研究では、保育者が子どものありのままの姿を受けとめたことで、信頼関係が生まれ、子どもたちにとって安心して過ごせる場になったと考えている。自分を受け入れてくれる安心感があるからこそ、『やりたい!』という意欲やこの時期ならではの自己表現や葛藤を思い切り表出できるようになったのではないかと感じている。今後も、子どもの心情に寄り添い、心が満たされるようなかかわりを続けていきたい。

3. 2歳児

【4月の子どもの姿】

進級し、新しい保育室を散策しながら気になる玩具を次々と手に取り、床一面にままごとの道具を広げながら遊んでいた。「自分でやる！」と保育者による援助を嫌がり、簡単な身の回りのことをしようとし「うさぎぐみ、りすぐみよりも大きいお兄ちゃんお姉ちゃん」という意識が見られた。進級したことへの嬉しさや期待がとても感じられ、「頑張るぞ！！」と張り切っている様子であった。しかし、新しい担任に甘えてよいのかと中々素直に思いを出しづらかったり、言葉で伝えられず動けなくなってしまう場面もあった。一人ひとりそれぞれに戸惑いや葛藤があり、不安から中々落ち着けず一日中泣き続け食事がとれない子ども、午睡に慣れずすぐに起きてしまう子ども、元担任が見えると安心して泣き止む子どもなど、様々な姿が見られた。そのような姿から、子どもと保育者それぞれが無理のない距離を保ちつつ、一緒に過ごしたり、1対1で遊んだり、受けとめていくことで少しずつかわりを深め、安心して過ごせるようになっていった。特に新入児は、戸外に出ることが気分転換になり、進級児は慣れ親しんだ乳児園庭に行くことで遊び始められた。泣いている子どもが少しずつ落ち着いてくると、泣いていなかった子どもたちが泣いたり自分を表出したりするようになり、「だっこして」「やって」「一緒にしよう」など、保育者に対して思いをどんどん伝えられるようになった。

【①肯定的な見取りからのアプローチ：9月】

まずはその子ども自身を知ることから始めるために、学年学習会の中で子どもの様子を出し合った。子どもの困り感を肯定的に捉え、色々な見方から意見を出していくことで、一人ひとりの『好き』や『よい』を伸ばしていける方法を共有していった。何をしている時が楽しそうなのか、好きなこと・ものは何かを知ること、コーナー遊びに取り入れったり、活動の中で楽しいと思える時間を増やしたりできるようにした。何もせず周りを眺めていたり、ウロウロと部屋を歩き回ったりする子どもはどう遊んでよいのか戸惑っているのではないかと考え、興味や関心、それぞれの発達に合わせた遊びを用意していった。ポットン落としやイタズラボードなど手指を使った簡単な繰り返し遊び、ままごとの中でも見立てて遊べるアクリルストーンや花はじきなどの素材、卵焼きやハンバーグなどの食材そのものを置き、様々な楽しみ方ができるようにした。子どもの姿や成長過程（おおよそ〜ぐらい）を見取り、保育者にやってほしいと訴える気持ちの背景を推察しながら、子どもの思いや要求を汲み取りつつ寄り添っていき、受けとめてもらえる安心感を大切にしていっていった。思いを出せるからこそ、『やりたい』『やってみたい』と頑張れるようになると考え、色々なことに挑戦したい気持ちを大切に、「危ないから禁止」ではなく“どうすればやってみたいを実現できるのか”を保育者間で話し合い、環境を整えて見守っている。

【②安心・安全な環境の中で見られる姿】



○思いや要求を伝える

朝のおやつのチーズが苦手で食べられずに仕草や言葉で嫌な気持ちを伝える。気持ちを受けとめてもらえたことで、どれだけなら頑張れると自分で決めて食べる姿が見られた。

○同じ流れが安心

食事の場所、片づけの流れ、朝の集いなど、毎日同じ流れにすることで身の回りのことを自分でしたり、クラスの活動に必要な道具を自分たちで用意したりすることができる。



○好きな場所で遊ぶ

ここが安心・安全の場と感じられるようになったことで、保育者から少し離れて遊び、自分たちで保育室、テラス、廊下と遊びの場を選ぶことができる。

【安心感の輪を広げる環境・かかわり】



○子どもの気持ちを大切にする

困った時、嬉しい時、悲しい時など思いを共感していき、寄り添い受けとめることを大切にしている。



○やりたいを実現!!子どもの発想を見守れる環境

子どもの遊び方を肯定的に捉え、禁止せずに「やってみたい」を実現できる方法を保育の中で考えていき、満足感を味わえるようにしている。豊富な素材、人数に適した玩具の数、遊びと遊びを自由につなげられ多様な遊びができる場の配置など、創意工夫ができる環境づくりをする。



【③何にトキメキ?何をヒラメいた?】



○自分で考える



ウレタンブロックや段ボールのついで、細かなコットンボールやアクリルストーン、花はじきなど豊富な素材を自由に使える環境にしている。物と物を組み合わせたり、つなげたりすることで、違った遊び方が生まれる。椅子や台に使っていたウレタンブロックをつなぎ合わせて一本橋にしたり、段ボールをトンネルに見立てたりして遊んでいる。

○友だちや保育者の刺激

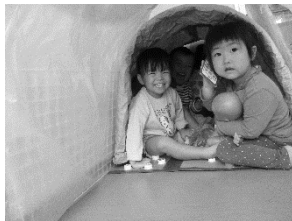
友だちや保育者と一緒に遊ぶことで「おもしろそう!」「やってみたい!」に出会え、子ども同士がつながりやすい。工事現場遊びでは、車で素材を運んだり移し替えたりするなど同じような遊びを楽しんでいる。また、お医者さんごっこでは、症状を伝える、注射を打つ、薬を出す、包帯をまくなどのやりとりをしている。



【どのようにトキメキをつくり出し、トキメキを支えヒラメキへ導いたか】



○自分で選べる環境



テラス、廊下、室内を自由に行き来できるようにし、様々な種類の素材を用意した。遊びと遊びがつながり、お医者さんごっこ×お世話遊びやブロック×車遊びとそれぞれが考えた遊び方を楽しんでいる。

○実体験や経験を遊びにつなげていく

日々の子どもたちの興味・関心を見取り、製作、歌、手遊びなどにつなげることでより学びが深まる(アイスクリーム、さつまいもなど)。ものとの出会いでトキメキ、そのものを深く知ることで色々な遊びへのヒラメキにつなげる。



◆子どもの姿からの肯定的な見取り

○進級し、新しい保育室の環境や保育者に慣れるまで、落ち着かない姿が見られた。

- ・好きな遊びが見つからない。
- ・新しい担任や友だちとの関係ができていない。
- ・保育室から飛び出して廊下でなにをしようかと戸惑っている。

→保育室の環境を見直し、興味のある遊びのコーナーを考えることで、安心して遊べる場となった。

○園庭に出ると広くて落ち着かず、非常階段下の狭いスペースにしていると落ち着いた。

- ・広い園庭で何をしたらよいのか分からない。
- ・異年齢のたくさん子どもたちに不安を感じる。

→保育室でしている遊びの延長を外でも再現する。狭い所にあったベンチを広い場所に持ってくることで伸び伸びと遊べる。



「くるまのしいなあ」
「さかみちおもしろいなあ」



・保育室での遊びが満足できるよう、子どもたちの興味のあることを用意することで、保育室での遊びに夢中になった。

・好きな遊びがあることで保育室でも安心して遊べるようになった。



「ガソリン
満タンにしよう」
「ここにガソリンスタンドがあるよ」



「どこいく？」
「ナビでピッピッ」



「これなに？」
「ならべたら、
みちみたい」

・車で出かける機会が多いので、保護者のしていることを模倣できるような遊びを用意する。

・保育者も一緒になって「どこ行く？」と助手席に座るなど、遊びを楽しむようにする。



「くるまみたいになったなあ」
「もっとタイヤないかな」



・ベンチを平行に並べたことで座れる子どもの人数が増えた。

・「タイヤがあったらいいなあ」と保育者の投げかけた言葉に本物のタイヤがある場所を子どもが知らせ、遊びに使うことができた。

・「ハンドルないやん」という子どもの声に、「探しに行こう！」と倉庫へ誘いかけ、それぞれが見立てたものを選ぶことができるようにした。



「ハンドル
みつけたー！」

わかったこと

「保育者が一緒にやりたい好きな遊びを叶えようとすることで、子どもの友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう気持ちが育った」



安心・安全な環境の中で見られる姿

○見えるところにいる保育者

側に保育者がいることで子どもたちは安心し、「もっとしたい」など気持ちを伝えることができ、保育者に受けとめてもらいながら遊んでいる。

○いつも一緒に慣れた場所

いつも一緒に保育者や友だちがいて、親しみのある遊びができる場所がある。



安心感の輪を広げる環境・かかわり

○親しみのあるもの

ミニカー遊びが好きな子どもたちの姿から、車が走る玩具の街をつくと喜んで遊び始めた。そこで、道やガソリンスタンドを用意するとミニカーを走らせて給油し、ドライブコーナーをつくと初めは一人で遊んでいたが友だち同士でドライブやピクニックごっこへと遊びを発展させ、子どもたちが次々と集まるようになっていった。



何にトキメいた？

○生活に密着

日常生活で車に慣れ親しんでいるので、ドライブコーナーでは普段はできない運転が自分でできることにワクワク感がもてた。また、園庭の非常階段下の場所を秘密基地として、ベンチに座る子どもが増えていき、お気に入りの場所になっていった。



何をヒラメいた？

○見立てができた

秘密基地横にあったコーナーポストを子どもたちが並べ始め、それを道に見立てて歩き始めた。そこで、秘密基地のベンチ1台を保育者がさりげなく出したことで、次々に子どもたちが座りに来た。すると「車をつくりたい」との声があがり、保育者や友だちと一緒にパーツとなるベンチを並べたり、タイヤを集めたりし始めた。



どのようにトキメキをつくり出しトキメキを支えたのか？

どのようにヒラメキへ導いたか？

○一緒に行動する

1台のベンチにみんなで座ることができず、他のベンチを保育者と一緒に探している時に、「タイヤがあればいいね」と保育者が意図的につぶやいたことで車をつくることへとつながった。「お芋畑にタイヤあるよ」という子どもの声に、一緒に探しに行き運んできた。相談しながら置くことで車のイメージを広げ、足りないタイヤを「もっと欲しい」と探しに行くことにつなげた。

○認める・共感する

保育者と一緒に倉庫でハンドルを探した。見守っていると、バトン・オセロ・フープなど自分たちで選んでハンドルに見立て、それぞれが運転手になり楽しんでいた。子どもたちがイメージしていることを保育者が形にし、達成感が味わえた。

【ポケットに入ったもの】



子どもに育った力

- ・いつも同じ保育者や友だちがいる安心感の中で自分の思いを言葉で伝える。
- ・いつも同じ生活の流れを大切にし、身の回りのことを自分でしようとすることで自立心につながる。
- ・様々な素材に触れ、見立てて遊ぶことで自分のイメージを表現する。



保育者に必要な力

- ・身近な環境の中で子どもたちの興味・関心を見取り、実体験や経験を遊びにつなげていく。
- ・子どもたちの遊びを肯定的に見取り、やりたいことを実現するために十分な環境をすぐに整える。
- ・一人ひとりの発達や月齢に応じた、みんなが楽しめる遊びを用意する。

【研究の総括】

今年度は学年で学習会を頻繁に行い、子どもたち一人ひとりの様子や困り感を担任同士で話し合ってきた。一人ひとりの子どものことを丁寧に見取り、色々な視点でその子どもに必要な援助を出し合って保育につなげてきたことで、こども園が、子どもたちにとって楽しく過ごせる安心の場となったのではないかと感じた。日々の保育の中で、保育者が子どもたちの「楽しい」を大事にしてきたことで、子どもたちの様々な意欲につながっていった。また、子どもたちが体験したことを遊びにつなげられるようにすぐに環境を整えて遊びに取り入れていった。一人ひとりの好きな遊びが充実することで友だちの遊びとつながり、イメージを膨らませながら子どもたち同士で一緒に遊びを楽しむことができた。実践を通して、保育者がスピード感をもってすぐに環境を再構成することの大切さに改めて気づいた。

何より、保育者が子どもの力を信じ子どもの発想を肯定的に見取ることで、子どもたちが「自分でやりたい」という思いをもつようになり、それらが叶えられ存分に楽しむことで満足感を味わうことができる。この「もっとやりたい」という思いの実現が、未来の意欲的に探求する力につながるのではないかと思う。

4. 3歳児

【4月の子どもの姿】

在園児と新入園児が混在する新しい環境の中で落ち着けず不安になることがあり、泣いて登園して来たり、保育者と1対1のかかわりを求めたりする姿が多く見られた。また、保育時間の違いがあり1号児の降園時間になると保護者が恋しくなる2号児や、まだ遊んでいたくて泣いて降園を嫌がる1号児がいるなど様々な姿があった。

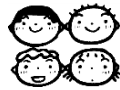
園生活が初めての子どもが多く、トイレに誘うが、トイレに行くのを泣いて嫌がる子どもや園庭から保育室に戻る時に保育室が分からず他のクラスに行ってしまう子ども、衣服の着脱に時間がかかる子どもなど様々な姿が見られた。また、おもちゃの貸し借りや順番を守ることが難しく泣いて取り合いになることや、気持ちが抑えられず手が出てしまうこともあった。1号児の保育時間が短くすぐに降園してしまうので、遊びの時間に1号児、2号児が交わっていないことも多かった。

家ではできない泥んこ遊びや目新しい遊具、おもちゃなどへの興味・関心が増え、少しずつ自分の思いを出したりやりたい遊びを見つけたりするようになった。また、周りにいる友だちの存在に気づいて意識し始め、友だちの近くで様子を伺ったり友だちのしている遊びを真似して遊んだり友だちに興味をもち始めた。

【①肯定的な見取りからのアプローチ：6月】

園生活に慣れてきたがまだまだ保育者に甘える姿が多く、1対1のかかわりを求めている。好きな遊びの時間も保育者の膝に座っていたり保育者の近くにある物を手に取ったりと自分から遊ぶことが少なかったので、甘える姿を受けとめつつも、自分から好きな遊びを見つけて楽しんでほしいと考えた。そこで、子どもの様子をよく観察し保育者間で話し合いをもった。子どもの姿を見ていると、遊ぶより保育者の膝を求めて保育室を歩き回り中々遊びが始まらなかったり、やりたい遊びはあるが保育者の側で遊びたくて保育者について行ったり、保育者が遊びに誘うことで遊び始めることはできるが、遊んでいる場から保育者が離れると遊びを中断したりする姿があった。これらは、自分で何をしてよいか分からなかったり、保育者に自分の遊んでいる様子を見てほしい、褒めてほしいと思っていたりする姿と捉えた。そこで、子どもと一緒に遊びながら一人ひとりの興味のあるものを見つけて、遊び場の環境を整えることにした。そして、子どもたちが興味のあることに目を向け、遊びの提案を行った。すると“やってみたい”と期待感をもち遊び始めた。次第に、次は「これやりたい」「これつくりたい」と子どもたちからの発信が増え、自分から遊び始める姿が見られた。また、子どもの「みてみて」「できた」に対しては保育者だけで受けとめるのではなく、友だちにも伝えるようにした。すると友だちにも受けとめてもらえて嬉しいと感じ、自分から友だちに話しかける姿や友だちの遊びに興味をもち、一緒に遊びを楽しむ姿が見られるようになった。

【②安心・安全な環境の中で見られる姿】



○自分の思いを出せる

色水遊びでは自分で好きな色や容器を選び、遊んでいる。できた色水は「飾りたい」「もって帰りたい」などと自分で保育者に伝え、「もう一回する」とやりたいことを繰り返し楽しんでいる。

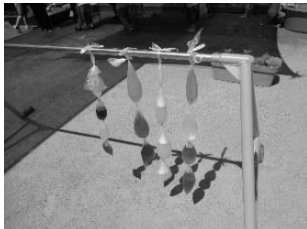
○友だちとのかかわり

保育者だけではなく友だちにも「この色混ぜてみる？」と声をかけ、一緒に色水をつくる姿も見られる。

○やってみたい

お家づくりを始めると「なになに」「一緒につくりたい！」と集まっている。「テープ貼るわ」「扉にしてみよう」と自分でつくってみたいものを考えてやろうとする姿がある。一人でするのは難しいが、保育者に伝えることでやりたいことが一緒にできることを楽しんでいる。

【安心感の輪を広げる環境・かかわり】



○やりたい気持ちを実現できる環境

保育者が複数の玩具を用意し、コーナーを分けて机を配置することで落ち着いて遊んでいる。見て分かるように容器やクレヨン紙を置いて自分でやってみる機会をつくっている。つくったものは飾れるように場所を準備している。

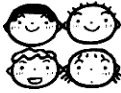
また、子どもの興味のある遊びを見取り遊び方を提案することで、「これがしたい」とやりたいことを保育者に伝える姿が増えてきている。子どもの『やりたい』を実現することで「次はこれがしたい」と期待感をもって遊びを楽しめるようにしている。

○いつも近くに保育者がいる

各コーナーに保育者がいることで、子どものやりたいことや困ったことに応えることができる。



【③何にトキメキ?何をヒラメいた?】



○見た目が変わる“変化”が楽しい

「泡に水を入れたら泡が消えた」「砂場に水を流すと水が消えた」など、思いついたことをやってみようと試した結果、見た目に変化があり、そこからさらに試行錯誤することを楽しんでいる。

例えば、色水遊びでは、透明の水が色づいていき、そこから違う色と混ぜ合わせることで様々な色に変化していくことを楽しんでいる。

○いっぱい嬉しい

木の実を集め、容器や袋の中にいっぱいに入れたり、水をたくさん容器に入れたりして、「見て！いっぱい！」と喜んでいる。自分でこれだけ集められた、入れることができたということが嬉しく、保育者や友だちに伝え、「すごいね」「いっぱいだね」と反応が返ってくることで、いっぱいにできたという達成感も味わっている。

【どのようにトキメキをつくり出し、トキメキを支えヒラメキへ導いたか】



○やりたいことを実現する

遊びの中で、こうしたいという思いがあっても、どのように遊べばよいかわからない姿があった。保育者が「どうしたい？」と思いを言葉にして伝えられるように問いかけ、一緒に考えることで自分の考える遊びを実際に経験し楽しめるようにしてきた。

○遊びのモデルや、きっかけをつくる

保育者が子どもと一緒に遊んで道具や素材を活かし、“モデル”となって遊び方を知らせることにより、子どもが自分なりの遊び方や楽しみ方をするようになった。また、友だちのアイデアや遊びを知らせていくことで、友だちに興味をもってかかわろうとしたり、一緒に何かをする楽しさに気づいたりするきっかけになっていった。

◆子どもの姿からの肯定的な見取り

○蚊やアリなどの虫を見て怖がり大騒ぎしたり、ダンゴムシやテントウムシなどを触る時の力加減が分からなくて潰してしまったりすることがある。

・小さな生き物を見たり、触れたりする経験が少ない。

→身近な生き物を子どもたちと一緒に探し、保育室でじっくり見られる環境をつくる。

→子どもたちの虫への興味を捉え、ダンゴムシやカマキリをつくってなりきって遊べるようにする。

触れた！怖くないで！
痛くない！



Dちゃん触ってたから
触れるで！触らせて！



ダンゴムシ、アゲハの幼虫など身近な生き物を
間近で観察したり、触ったりできるように生き物
コーナーをつくっていた。
小さな生き物に接する機会を大切にしていた。



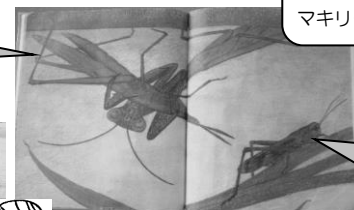
「部屋で飼いたい！」という子どもの気持ち
を受けとめ、どんな場所が住みやすいかな？何
を食べるのかな？など投げかけ、図鑑や絵本を
見て考える機会を大切にしていた。



カマキリのご飯が何なのか分からず、「葉っ
ばやで」と葉っぱをあげていたので、絵本『カ
マキリくん』を読んだ。



カマキリってバッタ
食べるんやって！



【カマキリくん】
作：タダ サトシ こぐま社



飼いたい！
バッタ探して
くる！



「カマキリくんバッタ食べるんだ
って。どうする？お部屋で飼う？逃
がしてあげる？」

（カマキリくんがバッタを
捕食するページ）
あー！！（息をのむ）



カマキリへの興味を遊びにも取り入れられる
よう緑のビニバックを出しておく。



（4日間）探したけど捕まえられ
へんかった。（カマキリくんお腹す
くから）逃がしてあげる。



（緑色が）カマキリくんみたい。
こんちゃん（絵本の主人公）
みたいにカマキリくんつくりた
い！



こんちゃんみたい
に描けるかな。
真似しよう。



一緒やな！
セミの抜け殻！



セミさん
元気ないなあ。
赤ちゃんやで（抜け殻
をそっと置く）



わかったこと

「保育者が子どもの考えを尊重しながら次の手立てを考えたり、どこからでも興味のもてる環境をつくったりする
ことで、子どもの探求心が育った」



安全な環境の中で見られる姿

○虫探ししてみようかな

保育者の側で小さな生き物にかかわってきたことで、一緒に探すことを楽しむようになってきている。また、保育室やテラスでじっくり観察できるスペースをつくることで、今まで興味がなかった子どもも興味をもてるようになっていった。



安心感の輪を広げる環境・かかわり

○虫への知識

観察する時には飼育ケースから出して見たり、盆に広げたりしたことで友だちと頭を突き合わせながらじっくり観察することができ、「葉っぱ食べてる!」「ウンチしたで」などの気づきや発見と一緒に楽しむようになっている。友だちや保育者が指で触れたり、手に乗せたりする姿を見て“触ってみよう”とする姿が増え、小さな生き物への興味が広がっていった。



何にトキメいた?

○絵本や図鑑で知る新たな発見

「これと一緒にや!」と図鑑や絵本で飼っている生き物を発見し、友だちや保育者に知らせたり「何を食べるんだろう?」「どんな所に住んでいるのかな?」と疑問に思ったことや不思議に思ったことがあると図鑑や絵本を広げ、「これちゃう?」と調べたりする楽しさを味わっている。

○触れたことの嬉しさ

カマキリは子どもたちが今まで触れてきた生き物よりも『大きくて強そう』という憧れの気持ちが芽生え、飼いたいという意欲が膨らんでいた。



何をヒラメいた?

○知りたい

絵本を見て「カマキリってバッタ食べるんや」と知り、飼うためにはどうすればよいか話し合う機会ができた。これまでの経験から図鑑や絵本には知りたいことや分からないことが書かれていることを知り、調べる楽しさを感じたり、3歳児なりに仮説を立てたりするようになった。

○なりきって遊びたい(〇〇になって遊びたい)

生き物の観察をしたり触れたりしているうちに「ダンゴムシをつくってみたい」「カマキリになりたい!」とカマキリのお面や服をつくってカマキリになりきって遊ぶことを楽しんだ。



どのようにトキメキをつくり出しトキメキを支えたのか?

○いつでも使える道具の準備

『小さな生き物と触れ合ってみたい』『虫捕りしたい』などの子どもの『やってみたい』を実現できるよう、虫かごや虫捕り網、飼育ケースなどをいつでも使えるように準備した。

○一緒に考える・見守る

気づきや疑問に対してすぐに答えを伝えるのではなく、自分たちで見たり読んだりすることで、子ども自身が考え、気づくことができ、自信へとつながっていった。



どのようにヒラメキへ導いたか?

○自分で調べられる環境

気づきや疑問をきき逃さず、気づきや疑問にあった絵本や図鑑を準備し置いておき、自分たちで調べ、発見したり、仮説を立てたりできるようにしてきた。

【ポケットに入ったもの】



子どもに育った力

- ・保育者と一緒に色々な遊びを経験し遊ぶ中で、自分から遊びを見つけて楽しんだり、やってみたい、つくってみたいという気持ちが芽生えたり、主体性が出てきた。
- ・友だちとかかわりトラブルも経験しながら、一緒に遊ぶ楽しさや思いやりをもって接するようになった。
- ・日々の園生活の中で、みんなで生活することに慣れたり簡単な見通しをもったりするようになった。



保育者に必要な力

- ・子どもが何に興味をもち楽しんでいるのかを見取り、その興味を遊びへとつなげ、子どものやってみたいという気持ちを実現できる環境を整えるなど、その都度、子どもの姿に合わせて環境を再構成していく。
- ・子どもと一緒に遊ぶ中で、子どもの発見や気づきに共感し、気持ちを受けとめていく。
- ・子どもの興味・関心や、遊びの幅を広げるために、教材研究を通して保育の引き出しを増やす。

【研究の総括】

園内研究会では子どもたちの姿を肯定的に見取することで、遊びに入れなかったり、保育者とのかかわりを多く求めたりする子どもが安心して園生活を送るための手立てを考える機会になった。そこから、その子どもに合った遊びを見つけていくことができた。また、他の保育者からの意見や見方をきくことで、さらに子どもの姿が見えるようになっていった。自身の保育を振り返ることもできた。

事例研究会では事例研究シートをつくる前に、他の保育者と遊びの流れを振り返り整理する時間を設けることで、遊びの一連の流れが明確になったり、自分では気づかなかった遊びのつながりを見つかったりすることができた。写真を通して振り返ることで、その時には見えなかった部分が見えてきたり、違う視点からの意見をきいたりする機会となった。

学習会や学年での話し合いでは、月々の保育を振り返り月案を立てたり、学年担任全員と一緒に話せたりすることで互いのクラスの悩みや保育や遊びの様子を共有し合う場になった。また、他のクラスの様子や子どもの様子を知ることもできた。

5. 4歳児

【4月の子どもの姿】

進級して保育室が2階になり、クラスや担任が変わったことへの嬉しさと、新しい環境への緊張や不安を感じているようであった。一人ひとりが周りの様子を伺いながら過ごし、遊びが見つけれずに落ち着かない様子が見られた。また、クラスの人数が増えたことで周りの様子に気づかず友だちと喋り続けたり、生活の仕方が変わったことで見通しがもてずに、今までできていた身の回りのことができなくなったり、保育者に何度も確認しに来たりしていた。

自分の気持ちを主張できる子どもも多いが、思いを言葉でうまく伝えられずに手が出てしまうなどのトラブルもあった。また、先生に甘えたい気持ちをもっているが、自分を見てほしいという気持ちを保育室から出て行くことで表したり、保育者を独占しようとしたりしていた。

一方、園庭に出ると、3歳児の時から過ごしている場所なので、好きな遊びがあり使いたい用具の場所も分かって安心して過ごしていた。前のクラスの友だちともかかわることができるので、今まで通り仲のよい友だちと集まり、好きな遊びや得意なことをしていた。

まずは、一人ひとりとゆっくりとかかわる時間を意識してつくってきたことで、少しずつ落ち着いて、保育室でも好きな遊びを見つけて遊ぶ姿が見られるようになった。

【①肯定的な見取りからのアプローチ：5月】

新しい環境にわくわくして興味をもち、遊び出す子どもが多くなった。空き箱や紙、セロハンテープなどを使ってつくることを楽しんでいて、自分たちで素材を探しに職員室に行こうとする自発的な姿を見せていた。

一人ひとりをよく見ると、友だちが楽しそうなことをしている姿を見ておもしろそうだと感じると一緒に遊んでいるが、一人だと遊びが見つけれない子どももいた。また、友だちとイメージを共有して遊びたいけれど一緒にできる友だちや遊びの場がないと感じている子どももいるようであった。失敗することが不安であったり、新しい環境の中で、まだ自分の思いを十分に言葉で表現できなかつたりしていると感じた。

そこで、一人ひとりが「何に興味があるのか」「本当にやりたくて遊んでいるのか」と、見極めてかかわっていくように努めた。子どもの「やってみたい」という気持ちに応じて、自由に使える用具を少しずつ増やし、保育者も一緒に遊び、子どもたちのイメージを実現したり子ども同士をつないだりする役割を担ってきた。また、一人ひとりの思いをきいたり、共感したりしながら、“楽しかった”“またしたい！”と本当に自分がやりたいことを満足いくまで楽しむことができるように援助していくことを心がけてきた。

【②安心・安全な環境の中で見られる姿】



○じっくり遊ぶ

空き箱やペットボトルのキャップを使ってケーキをつくっていた。「ろうそくも立てたい」と、どうしたら立てられるか考えながらじっくり遊んでいた。



○先生に認めてもらう

切り紙で偶然カブトムシのツノのような形ができる。頭につけて楽しんだ後、次は先生にもつけてほしくて保育者のところにやって来た。

○友だちの遊びを模倣する・一緒に遊びたい

友だちがつくっている姿を見て同じように作り始めた。その後、それぞれがつくっていた電車を「つなげよう」と言ってつなげ、一緒に乗って遊ぶことを楽しんでいた。



【安心感の輪を広げる環境・かかわり】



○保育者が側にいて、助けたり教えたりしてくれる安心感

困った時に声をかけたり、見てほしい気持ちにすぐに応えたりできるように、遊びを近くで見守る。



○自由に使って表現する

自分のサインペンが使えることを喜んでいた。5月頃クラスには、スズランテープ・ビニールテープ・セロハンテープ・水性マーカーなどを準備していた。自分たちで片づけができる範囲の量を置いた。



○遊ぶ空間の選択

廊下や保育室で、大きい机小さい机など自分で選んで遊んでいた。遊び出しやすいように段ボールの囲いを広げておいた。

【③何にトキメキ？何をヒラメいた？】



○素材からイメージを広げる

果物のネットを足に装着すると「ロボットみたい」「次はお面もほしい」と段ボールに穴をあけ、ロボットをつくっていた。



○自分がつくったものを気に入っている

自分が好きなキャラクターをイメージして、画用紙を切って目の位置を合わせ、穴を開けてつくったお面を嬉しそうにつけて、鏡でチェックしていた。



○経験したことで遊ぶ

バス遠足に行った次の日から、リュックにお弁当を入れて、段ボールの囲いをバスに見立てて遠足ごっこをしていた。



【どのようにトキメキをつくり出し、トキメキを支えヒラメキへ導いたか】



○子どもの姿を予想して準備しておく

くるくる棒、お面ベルト、ペットボトルのキャップ、様々な大きさの空き箱など、扱いやすいものを準備して、やりたいと思った時にすぐに使えるようにしておく。

お家ごっこの中で「遠足」という言葉が出てきたので、紙袋でたくさんリュックサックをつくったり、弁当に見立てられる容器を準備したりしておいた。



○満足できるようにイメージを形にする

カブトムシのツノを本物みたいに頭につけたいと保育者に伝えに来たので、準備していたお面ベルトに貼った。子どものイメージを引き出しながら一緒に考えたり、提案したりする。



◆子どもの姿からの肯定的な見取り

○進級当初は、気持ちが高ぶり好きな遊びを見つけられず、ウロウロする姿が見られた。

- ・担任が変わったり子どもの人数が増えたりと環境が変化したことで、保育者に声をかけることができず、どうしたらよいかわからない。

→自分のイメージを形にすることができるように、保育者がイメージをきき出したり側について一緒につくったりすることで、やり方が分かり自分でつくろうとするようにした。

○遊びに使える画用紙を準備しているが、どう使えばよいのか分からず使おうとしない。また、段ボールでお面をつくるのが気に入ってやってみたいと思っているが、段ボールを切るのに力が必要でうまく切れない。

- ・用具（はさみ）の扱い方や、イメージしたものを切って遊びに活用する経験に個人差がある。
- ・子どもにとって扱いにくい素材であることが、遊びに活用できない原因にもなっている。

→遊びのイメージに合わせて扱いやすい素材を準備し、側で保育者も一緒にして扱い方を知らせるようにした。

→一人ひとりの子どもに合わせて素材を出したり、環境を見直したりして再構成した。

いろいろな色の画用紙あるな。これ（プチプチ）、ご飯みたい。

これなら私も切れそう!

お寿司屋さんみたいにお皿回したい!!

お寿司つくりたい!

子ども一人ひとりに合わせた扱いやすい素材を用意し、遊びに活用しやすいようにした。子どものイメージを共有して一緒に遊んだり、考えたり見守ってくれる保育者が両クラスにいる。

最初はプラスチックの皿をたくさん並べて寿司屋さんごっこを楽しんでいたが、よく行く回転ずしのイメージから「お皿を回したい」と考え、手で回して手動回転ずしを楽しんでいた。「なんか違うねんな〜」と一人が言ったことで「どうしたらいいかな?」と保育者も一緒に考えた。「お皿がくっついていたら回るかな?」と言うと、皿をテープでレーンにくっつけ始めた。

紙のお皿にしよう!

お皿にかわいい絵を描いたら楽しそう!

お寿司には、しょうゆがいるで。しょうゆつくろ〜!

魔法の紙あるで。これでつくろう!

すごい!回ってる!

回転してくるから早く食べなきゃ!

ヒモでお皿をくっつけよう!

プラスチックの皿をひもでくっつけたが、重くてお皿が落ちて回転しなかった。軽い皿をつくろうと素材の中から画用紙を選んだが、テープをつけるとはがすときに破れてしまう。試行錯誤していたので、保育者も一緒に考え、画用紙より強い紙と一緒に探す。

魚の形のしょうゆ入れを置いておくと「醤油もいる」と置いていたクレップ紙を使って醤油色の色水をつくっていた。

わかったこと

「保育者と一緒に遊び、一人ひとりに合った素材を準備することで、子どものやってみようという気持ち、達成感、できたという自信、イメージを形にする、試行錯誤する力が育った」



安心・安全な環境の中で見られる姿

○安心できる保育者がいる

一緒に考えたり、イメージを形にしてくれたり、助けてくれる保育者が側にいることでじっくり遊んでいる。自分で素材や扱える用具を選んで遊んでいる。学年間で行き来しながら、したい遊びを選んで友だちと一緒に楽しんでいる。



安心感の輪を広げる環境・かかわり

○扱いやすい素材がある

セロハンテープ・養生テープ・厚紙・マジック・スズランテープ、クレープ紙など、色々なものを自由に使えるように置いておく。一人ひとりに合わせて、一回切りができた細長い画用紙や使いやすいように切ったプチプチなどを置いておく。



何にトキメいた？

○やってみたいな！

今まで、友だちがお寿司づくりをしているのを横で見っていた子どもも、様々な大きさの画用紙を置いたことで、「これならできる！お寿司つくりたい！」と自分からつくり始めるようになった。また、数人がお寿司屋さんごっこを楽しむようになったことで、「回転寿司みたいにお皿回したい！回したら楽しそう！」と子どもたちから新たなアイデアが出てきた。



何をヒラメいた？

○違うものでも試してみよう！

お寿司を置いていたプラ皿をテープでくっつけたが、机の下側に行く時に落ちてしまい、うまく回転しなかった。重いから落ちると考え画用紙でお皿をつくるが、テープを剥がすと破れてしまう。お面づくりで使っていた厚紙を見つけ試してみると回った。「お皿に絵を描いたらかわいい！」と一人が描き始めると、みんなで楽しそうに描いていた。うまく回ったがしばらくするとお皿からセロハンテープが剥がれてしまう。「強いテープ！」と養生テープを探し出し、セロハンテープの上から貼ったことで剥がれることなく回すことができた。また、重いものを乗せて回せるようになった。



どのようにトキメキをつくり出しトキメキを支えたのか？

どのようにヒラメキへ導いたか？

○イメージを形にする

子ども一人ひとりに合わせた素材を用意することで、イメージがしやすくなった。また、保育者が子どもとイメージを共有し実現できるようにすることで、子どもたちがやってみたいと意欲的に試行錯誤するようになった。イメージが形にできたことで自信につながった。

【ポケットに入ったもの】



子どもに育った力

- ・偶然できた物を色々な物に見立てて遊んでいたが、つくりたい物をイメージしてから素材を選んでつくれるようになり、イメージする力が育った。
- ・今までやったことのないことでも意欲的に取り組めるようになったことで、自信につながり、新しいことにも挑戦するようになった。
- ・友だちが一緒だと楽しいことがたくさんあることを知った。
- ・友だちと一緒に遊ぶには、思いの伝え合いが必要なことを理解した。
 - ・学年のどの先生も自分のことを助けてくれると分かり、意欲的になった。



保育者に必要な力

- ・一人ひとりの子どもの姿を予想し、何に興味・関心があるのかを探る。
- ・子どものイメージを形にするために環境を整え、子どもの興味が薄れていく前に子どもの要求に応える。
- ・一人ひとりの子どもの思いを受けとめ、共感する。
- ・学年間で全員の子どもたち一人ひとりを見守る。
- ・保育者同士がお互いのことを気遣い、信頼し合いながら情報を共有し連携する。

【研究の総括】

保育者一人だと子どもの姿を肯定的に見取ることが難しかったが、学年間で子どもの姿やなぜその行動をしているのかなどを出し合って考えていくことで、肯定的に見取り、どういう手立てをしたらよいか分かるようになってきた。

4歳だからこうするではなく、目の前の子どもたちの姿を捉え、子どもを理解し、今何を楽しんでいるのかを見取って、見守ることがよいのか次のことを提案する方がよいのかなど、一人ひとりにあった援助を考えてかかわっていくことで、一人でじっくり遊ぶことから友だちともつながっていけるようになると分かった。

限られた時間内に保育準備をしたり、書類作成をしたりすることは難しいが、時間を有効に使えるように保育者間で連携をとって進めていく大切さを知った。

学年でクラスを行き来することで、遊びの選択肢が増え、やりたい遊びを見つけやすくなったと感じる。保育者間の信頼関係が、子どもたちも保育者のことを信頼して過ごすことにつながり、一人ひとりが安心して、好きな遊びを見つけて楽しむことができると感じた。

6. 5歳児

【4月の子どもの姿】

5歳児の保育室や新担任との出会いといった新しい環境への不安から、あちらこちらでいざこざやトラブルが起き、泣き声や叫び声がきかれ落ち着かない様子が見られた。一方、自分の周りでトラブルが起きていても、まるで何も起こっていないかのように遊び続ける姿も見られ、友だち関係の希薄さも気になった。その姿は、人やものにイライラをぶつける姿を見せる友だちから、自分を守るために敢えて距離をおいているようにも感じた。また、自分の思いや感情の表出、表現の方法が乏しく、押す、叩くなどの行動で表す姿があった。また、本人は楽しく遊んでいるつもりだが、危険を察知することが難しく危なっかしい場面も多く見られた。

コロナ禍での保育活動が数年に渡って続き、異年齢でのかかわりや日頃の遊びや行事にも制限があったことで、身近に憧れられる年上の存在を感じられず、5歳児になったら〇〇してみたいというような期待感ややり遂げたことによる自信の積み重ねがやや希薄であったことが一因と考えられた。

これらの姿は、子どもに限ったことではなく、担任保育者も同様に不安や見通しをもちにくい現状に自信を無くし、日々の保育や生活に楽しみを見出せなくなっていた。

【①肯定的な見取りからのアプローチ：5月】

保育室や担任が変わったという環境の変化に落ち着かず、周りにいる友だちを蹴ったり押しのけたり、物を床に投げつけたりするような行動をとる子どもの姿を、自分が安心できて思い通りに遊べる場所がないことや、子ども自身が抱えるモヤモヤした気持ちを言語化することが難しく、保育者にも分かってもらえないという辛さからの不安の表れだと考えた。また、新しい環境になり何でどのようにして遊んだらよいのか分からないことから、保育室や廊下を走り回り友だちと衝突してトラブルがあちらこちらで起こっているのではないかと捉えた。

そこで、子どもたちにとってこども園が安心な場となり、やってみたい遊びを見つけて楽しむことができるように環境構成を行った。まずは、遊び方が明確であり、今までの経験からすぐに遊べるものを準備した。すると、何をして遊ぶことができるかただけで分かるようになり、今日はこれをやってみようと、遊びに自分から向かい落ち着いて楽しむ姿が見られるようになった。また、保育者は、子どものモヤモヤした気持ちなどありのままの姿を受け入れ寄り添うことで、子どもたち一人ひとりが大切にされているという感覚がもてるように努めてきた。

安心安全な環境と保育者の受容的なかかわりにより、子ども一人ひとりが少しずつ落ち着いて遊びに向かうようになってきた。また、保育者も一緒に遊びの楽しみを共有し、保育者が仲立ちとなってクラス全体に遊びの楽しさを伝えたことで、友だちと一緒に遊ぶ楽しさや心地よさを味わい、相手の思いに気づいたり、思い通りにならない時の気持ちのおさめ方など折り合いのつけかたを知ったりしつつあった。子どもの姿や思いは一人ひとり違うので、保育者が子どもの姿や思いを肯定的に見取り、寄り添いながら環境構成や援助を行い、一人ひとりの育ちを支えていきたいと考えた。

【①安心・安全な環境の中で見られる姿】

C: 一緒に行こう

T: 何して遊ぶ?



秘密基地やねん。
先生も一緒に
遊ぼう。

○保育者が一緒に遊び、よりどころとなる

「何をして遊ぼうかな?」「気の合う友だちは来ているかな?」と一人ひとりの思いは違って、不安な様子の子どももいた。好きな遊びの時間に寄り添い安心できるようにしようと考えた。園庭に出ると、子どもたちは自分たちのやりたい遊びを求めて走り出して行き、少しずつ、自分自身で安全に遊ぶ方法や約束も守れるようになってきているので、裏庭も遊びの場となっていく。

触って
みたいな



これは何だろ
う?先生にきい
てみよう



【安心感の輪を広げる環境・かかわり】



見つからないように
そーっと...



何見つけたの?
見せて



捕まえてお部屋へ
持って行きたいな

○子どもも保育者も一緒にドキドキ&ワクワク

Aが「チョウチョが逃げないように静かにそーっと近づくで」と周りの友だちに知らせ、見事に捕まえることができた場面である。虫捕りをしていた子どもたちにとって、捕まえるまでの時間は緊張感があり、思いを共有していたことが伺えた。後の振り返りでは、Aは、捕まえた瞬間の様子を身振り手振りで嬉しそうに話していた。また、ダンゴムシやテントウムシなども捕まえたが、今までの経験から、空を飛び回るチョウは虫かごに入れておくのはかわいそうだと感じているようで、遊びの終わりに「バイバイ」と言いながら放していた。

園庭に身近な生き物が生息しやすいような自然環境が整っていることや、保育者も一緒に虫捕りをしたり、クラスで体験を共有して子どもの思いに共感したりしたことで、子どもたちが伸び伸びと自己発揮しながら、興味をもって自然にかかわることができた。

【③何にトキメキ？何をヒラメいた？】



ゴザのところはリビングってことな。ケースは机と椅子。

きれいな色を混ぜたらもっときれい！



○何にでもなる、扱いやすい、可塑性のある素材

秘密基地では、布・ビールケース・ゴザなど、何にでも見立てられ子どもたちだけで扱えるものを準備した。数も豊富に用意することで、イメージがより沸きやすく、友だちと同じ場でイメージを出し合って一緒に遊んでいた。

○場と教材の工夫

園庭に咲いているチューリップやパンジーなどの花びらを使い、4歳児の時から楽しんでいた色水遊びをしていた。また、保育室では絵の具を使って絵を描くことを楽しみ、片づけの際に絵筆から出る鮮やかな色に見入っている姿や、「ジュースみたい」というつぶやきがあったので、色をつくり出す楽しさを味わってほしいと考え、草花のほかにも、クレープ紙を準備した。小さな容器にカラフルなジュースをつくり、それらを大きなペットボトルに移し替えてミックスジュースをつくり、混色の不思議さやおもしろさに気づいていた。



【どのようにトキメキをつくり出し、トキメキを支えヒラメキへ導いたか】

水が出なくなった…



よし！汲みに行こう

重たい時は台車が楽ちん



○問いかける言葉がけ

色水遊びを楽しんでいる間に、ウォーターサーバーの水が減ってしまい出なくなった。「さっきまでは蛇口をひねるだけで出ていたのになんでだろう？」と疑問をもっている。水位が減り、蛇口の高さまで水が届かないことが原因だが、容器も変形していて気がつかない。子どもたちの考えや疑問に寄り添ったり見守ったりしながら様子を見守った後、容器の形を整えてみた。すると、蛇口に水が届いていないことに気づき、また、容器の中の水がずいぶん減っていたことにも気がついた。早速、友だちと協力し合って水道まで運んだ。汲みに行くときは軽かったのに水を汲み戻ろうとすると、重たくて一人では到底運べない。そこで、保育者が「重たいものを運べる道具ないかな？」と言いながら、台車の方を指すと、「あれ使って運ぶわ」とヒラメキ、意気揚々と友だちの待つ遊び場まで戻っていった。

◆子どもの姿からの肯定的な見取り

○進級当初は、落ち着きにくくなかなか遊びが見つからない姿が見られた。

- ・新しい環境の中で、何でどのようにして遊んだらいいかわからない。
- ・遊びのアイデアはあるが、自分たちで形にすることがまだ難しい。

→何をして遊ぶ場が分かりやすいように場を整えたり、昨年楽しんでいた遊びを再現できるようにしたりして、少しずつやりたいことが見つけられるようにした。

→「どうやってつくる?」「何を使う?」など具体的にイメージをきき出しながら素材を準備することで、「自分でやってみたい」という気持ちをもてるようにした。



宝石いっぱいできた!
いっしょにませ〜!



ジュースつくろう!
色々な味のジュース、お
いしそう!



子どもたちの「やりたい」がたくさん出てくるよう
に、豊富な素材や遊びの場を整えた。やったこと
のある遊びに安心感を抱く子どもが多いと感じたた
め、今までに経験したことをアレンジして新たな遊
びとして楽しめるように、子どもたちに思いをきき
ながら一緒に遊びをつくっていった。



自動販売機つくろう!

「どんなもので自動販売機をつく
る?」「大きさはどのくらい?」などと、
子どもたちに具体的なイメージをきき、
段ボールを準備した。



宝石屋さんで買い物したら、のど乾く
から、ジュースも売ったらいいやん!



こうやって
ボタン押すねん。



段ボールの大きさに合わ
せて紙を切ろう!



ここから滑り台みたいに
ジュースが転がるねん。



いっしょにませ〜!



ジュースを買って飲むことを楽しむ子ども、お店屋さ
んとしてジュースを売ることを楽しむ子ども、様々な味
のジュースをつくることを楽しむ子どもなど、様々なこ
とにトキメキを感じていた。

生活の中で経験していることなので遊びの理解がしや
すく、友だちと同じイメージをもって遊べた。



どれにしようかな?



「ボタンをつけたいけれど
何でつけようかな?」「ジュ
ースが出てくるところはすぐ
に開くようにしたい」「コロコロ
って転がってジュース出たら
いいなあ」などのアイデアを実
現できるよう、具体的にイメ
ージをきき出したり一緒につく
ったりした。

わかったこと

「保育者が一緒に遊び、提案したり、アイデアを受け入れたりすることで、子どもがイメージや思いを形にする楽しさを感じた」



安心・安全な環境の中で見られる姿

○身近でイメージをもちやすいものから

初めは保育者が用意したものの中から選んで遊ぶことで安心していましたが、次第にやりたいことが出てきて、今までに経験した遊びをもとに「先生、こんなやりたい」と考えていることを言葉で伝えるようになった。そして、楽しんでいた宝石屋さんと色水遊びから、「宝石屋さんでジュースも飲みたい」という意見が出て、「自動販売機つくろう」という思いへとつながった。



安心感の輪を広げる環境・かかわり

○分かりやすい遊びの場づくり

まずは、子どもたちが落ち着いて園生活を送り好きな遊びを見つけられるように、遊びの場を整えたことで、自分で好きな遊びを見つけられるようになっていった。

○選べる素材の準備

子どもたちの「やりたい」がたくさん出てきてほしいと願い、豊富な素材を準備した。そして、子どもたちの考えていることを具体的にききながら、保育者も一緒につくっていき、思いを形にする手助けをした。



何にトキメいた？ 何をヒラメいた？

○本物に似ている素材を探す

つくりたいものが「自動販売機」という、子どもたちにとって身近なものであったため、「ボタンもつけよう」「ジュースが出てくるところは穴あけないと！」と様々なイメージが出てきた。そして、つくり進めていくうちに「ジュース出るところもいるけど、入れるところがないと出されへん」と仕組みをイメージしたり、実際にジュースを入れてみて転がりにくいことに気づき「ここに段ボールの板をくっつけて、滑り台みたいにしたらいい感じに転がる」と改良したりと、どんどんアイデアが広がっていった。つくり進めるたびに振り返りでクラスのみんなに知らせていたことで、他の子どもたちもつくることに参加し「すごい！できたなあ！」と完成を喜び合うことができた。クラスみんなにとって大切な自動販売機となった。



どのようにトキメキをつくり出しトキメキを支えたのか？

○どのようにヒラメキへ導いたか？

○仕組みを一緒に考える

「自動販売機にボタンをつけたいけれど、何をボタンにしようかな？」と悩んでいた子どもに、様々な素材があることを知らせ、その中から試して選べるように促した。また、接着する道具として何を使えばよいかも子どもと一緒に試してみて、ガムテープが一番くっつきやすいということに気づけるように見守った。

○振り返りで共有する

ジュースの取り出し口としてくり抜いた段ボールの大きさに合わせて画用紙を切るとちょうどよい大きさの蓋になると気づいたことや、切った段ボールを活用して自動販売機の中にジュースが転がりやすくなる滑り台をつくることを思いついたことなど、子どもたちのヒラメキをクラス全体で共有し、他の子どもたちも興味をもてるように働きかけた。

【ポケットに入ったもの】



子どもに育った力

- ・ありのまま伸び伸びと自分を表現する。
- ・自分が大切にされているという感覚をもつ。
- ・友だちの思いを知り、けんかをしても仲直りできる。
- ・一日の生活に見通しをもち、身支度や整頓を丁寧にする心地よさを感じる。
- ・登園を楽しみ、友だちや様々な遊びへ興味・関心を広げる。
- ・自分の思いを互いに言葉で友だちと伝え合いながら遊びを楽しむ。
 - ・めあてに向かって意欲的に取り組み、できた満足感を感じる。



保育者に必要な力

- ・ありのままの姿を受容する心
- ・一人ひとりの子どもの気持ちに寄り添う温かなまなざしや態度
- ・答えや解決を急ぐのではなく、子どものもやもやした気持ちを共有する姿勢
- ・居心地のよい安心安全な環境を構成するスキル
- ・子どもの実態と育てたい力を明確にしてねらいを立てる
 - ・子どもの“今やりたい！”に応える瞬発力

【研究の総括】

子どもたちが主体的に遊び未来につながる力を身につけるためには、保育者が一人ひとりが安心して過ごせる居場所を整え、子どものありのままの姿を受容し、温かなまなざしで寄り添いかかわることが大切であり、これが保育の土台となる。この土台をしっかりと築くことで、子どもたちは、めあてに向かって挑戦したり創意工夫して遊んだりすることを楽しむようになった。また、友だちや保育者と対話し心を通わせながらともに遊びや生活を創り出すことで友だちとのかかわりが深まり、保育者が肯定的な見取りや言葉がけを意識していったことにより、子どもたちも友だちや物事に対して肯定的に捉えられるようになった。

しかし、保育者にとって、子どもの実態や季節、園での行事などを踏まえながら、遊びを通して育てたり身につけさせたりしたい力を、どのような遊びや環境のもとでどのように援助をしながら育んでいけばよいのかと考えるのは、大変難しいことであった。子どもの姿が予想に反することで保育者が焦ったり、待ちきれずに答えを出したりしてしまいそうになることもあったが、子どもたちに任せ答えを出さずに見守ることで、子どもの育ちを感じられることがたくさんあった。子どもたちの力を信じて待つ「保育者の姿勢」の大切さを改めて感じる事ができた。

子どもたちの思いや力は目には見えないことが多いが、見えにくいからこそ子どもに寄り添い理解しようすることが大切である。子どもの小さなつぶやきや発見を見逃さず、一緒に遊びを楽しめる保育者をめざしていきたい。



第3章 温かいまなざしのその先に ～見方を変えると保育が変わる～



第3章 温かいまなざしのその先に

～見方を変えたと保育が変わる～

1. 未来につながる子どもたちの力をどのように培うか

保育の始まりは、肯定的な見取りからのアプローチ

年度当初、子どもたちは、新しい環境に期待をもっているが、どのように遊んでよいのか分からず友だちの遊んでいる様子を見ていたり、学年が上がり行動範囲が広がったものの、「やっていいのか」「やるとどうなるのか」という見通しや判断がもちにくかったりする場面が多く見られた。また、身体を動かすことやつくることへの興味・関心、自然と触れ合った経験などに希薄さを感じる子どももいた。自ら「やってみよう」という気持ちがかもちにくく、「やってほしい」「やり方が分からない」と感じているようであった。また、環境に興味や関心を示しつつも、家庭やこれまでの環境との違いから不安な気持ちを様々な行動で表している姿もあった。そこで、これらの子どもたちの実態から、一人ひとりの姿をまずは「～ができない」ではなく、「〇〇という気持ちの表れである」と肯定的に捉えることを保育の基本として、実践を積み重ねてきた。

肯定的に見取ることは、子どもの姿を事実としてありのままに捉えることから始まる。ここでは、子どもの行動を保育者がどのように捉えるのかという見取りの方向性がポイントとなる。子どもの姿を「～が（まだ）できていない」と捉えると、「できないことがいけないこと」という思考に陥り、できていないことをこれまでの家庭での育て方やこども園での保育の至らなさなど、他へ責任を押しつけることにもなりかねない。そこで、まずは、「できない」という事実に対して、「なんで？」と情報収集をしていくことが大切になる。この時に参考となる情報としては、発達の経過や家庭の背景、いつ・どのような場面でどのような様子が見られるかなど集団の中で見せる子どもの姿や行動の背景などがあげられる。これらの情報から、子どもの行動を総合的に判断し、「発達の過程の姿である」「〇〇する時に困っている」「理解できていない」「やり方が分からない」「興味をもっていない」などと内面を推察することで、保育者は子どもの困っている姿に対して「解消してあげたい」「どうにかしてあげたい」と積極的に手立てを考えるようになる。

安心・安全な環境の中でどのような子どもの姿が見られるか

肯定的な見取りから手立てを考えていく際に一番大切にしたいことが、子どもたち一人ひとりにとっての「安心・安全」な環境づくりである。年度当初、初めての園生活や新しいクラスで今までとは違う友だちや保育者と過ごす環境に、子どもたちが戸惑いや不安を感じている様子が見られた。授乳や食事を嫌がったり、泣くことで自分の思いを表現したり、保育者の側から離れられず自ら遊び始めることができなかったり、何をして遊べばよいのか分からずそわそわしたり、保育室を離れていってしまうなど、様々な姿があった。そこで、生活する場所が子ども一人ひとりにとって「安心・安全」であるということはどういうことなのかを個々の姿から問い、かかわったり、保護者と連携したりしながら、生活のリズムや遊びの場を整えてきた。まずは、受容的・応答的なかかわりを大切に、子どもの思いや気持ちに寄り添ったり共感したりすることを繰り返してきた。そうすることで、子どもが“先生が自分のことを受けとめてくれている”“先生がいるから安心”とを感じるようになり、保育者と

の間に信頼関係が構築される。また、保育者が子どもの興味・関心を見取り一緒に遊んだり、遊び環境を整えたりすることで、“やってみたい” “楽しい” “もう一回” と、子どもが遊びを楽しむようになってきた。

「安心・安全」な環境の中では、子どもが心を動かし自ら身近な環境に主体的にかかわろうとするようになる。そして、少しずつ安心の輪を広げながら試したり、発見したり、繰り返し遊びに没頭するようになる。さらに、身近な保育者や友だちと一緒に遊びを楽しんだり、自分の思いを伝えたり、友だちの思いに気づいたり経験やつながりを広げていく。

何にトキメキ、何にヒラメキながらどのような力が培われてきたか

「安心・安全」な環境の中で身近な環境に主体的にかかわるようになると、“やってみたい” “楽しい” “もう一回” という気持ちが生まれる。子どもがことやものにトキメいている姿を捉え分析することで、どんな援助や環境がその姿へとつながったのかが分かる。「トキメキ」はある瞬間に「ヒラメキ」に変容していく。子どもが何をヒラメいたのかを捉え分析することで、子どもにどのような力が身についているのかが分かる。

今年度の研究では、子どもたちは、「水」「身近な生き物」「車」「工事現場」「自動販売機」「回転寿司」などの生活に密着しているものに興味を引きつけられ「トキメキ」を感じていた。また、具体物よりも見立てられる素材の方が遊びの中の様々な場面で活用されていた。そして、興味を引きつけられた環境をいつでもかかわることができるようにより身近に準備しておくことで、興味・関心を追及していく姿が見られた。“やってみたい” “楽しそう” と子どもたちが感じるものを、発達に応じてどのように環境として準備し、家庭ではできない経験を保育の中でどう実現させていくかが、保育の質の向上につながる。

「ヒラメキ」は、「より本物に近づきたい」「しかけ、仕組みを考えたい」「動いたり変化させたい」といった子どものやりたい思いである。保育者は、「組み合わせられるような」「選べるような」「自分でできるような」教材を準備したり、困っているときには援助をしたり一緒に考えたりしながら思いが実現できるように支えていくことが大切である。これらを繰り返す中で、子ども自身が経験したことを生かしながら自ら新しいことに意欲的に取り組むようになる。

このように、「トキメキ・ヒラメキ」を繰り返す遊びの過程で、感じたり・気づいたり・分かたり・できるようになったりする「知識及び技能の基礎」や、気づいたことやできるようになったことなどを使い、考えたり・試したり・工夫したり・表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、心情・意欲・態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」が、培われていく。これが“未来につながる子どもたちの力”である。

2. 保育者の資質・能力をどのように培うか

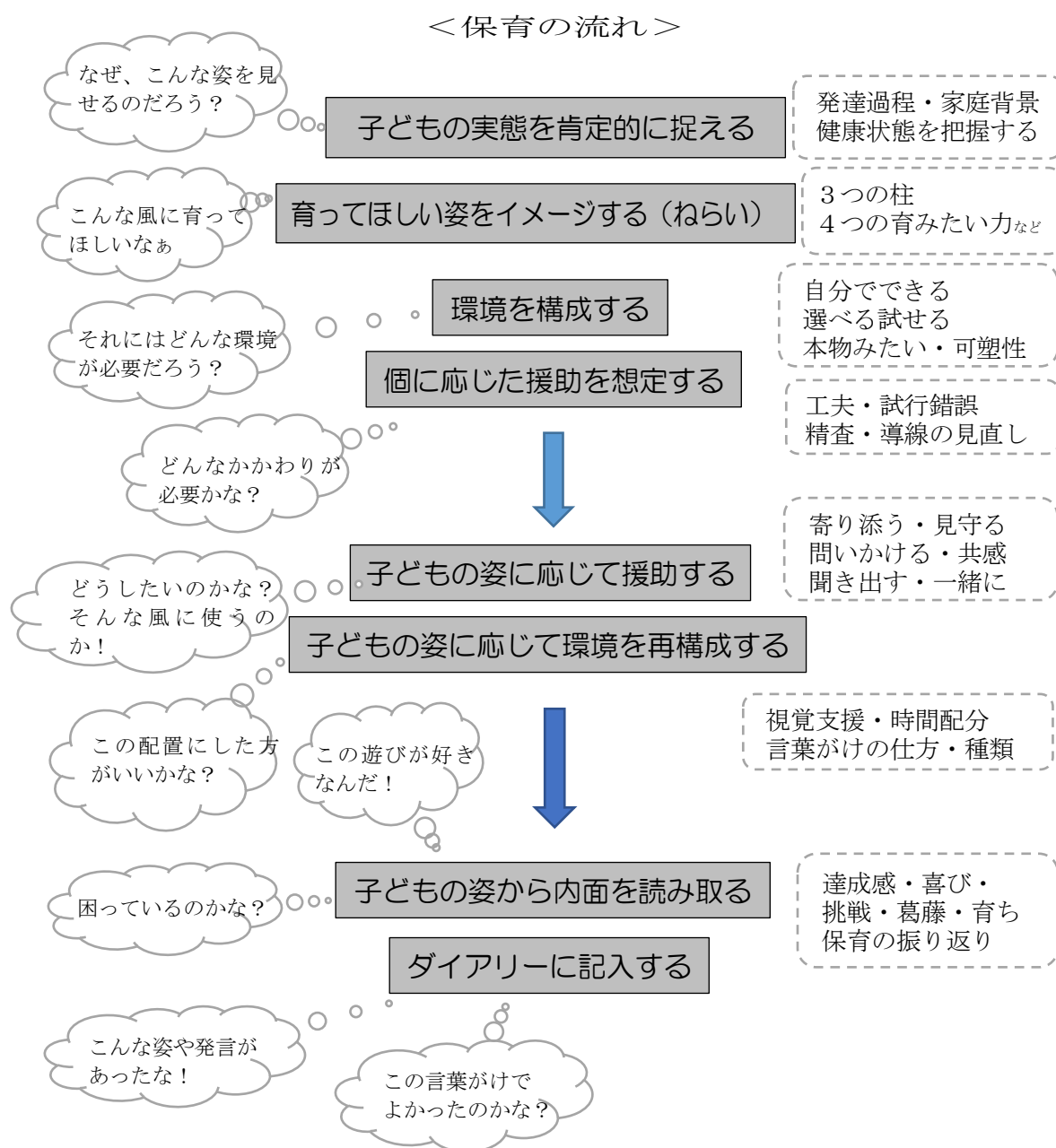
保育の充実を図りながら研究を進める中で、保育者が楽しそうに子どもとかかわったり、生き生きと嬉しそうに子どもの話をしたり、保育者同士で保育実践について楽しそうに話し合ったりする場面が多く見られた。一方で、保育の手応えが感じられずに悩んだり、子ども理解の糸口が見えにくく相談を受けたりすることもあった。保育者が「嬉しい・楽しい」と

感じながら保育をしている時には、子どもたちも笑顔で充実した園生活を送っている。しかし、保育者が課題を抱えているときには、必ずそこに困っている子どもが存在する。

そこで、この、保育者の「嬉しい・楽しい」こそが、保育の質向上のキーポイントになると考え、どのような時に保育者が「嬉しい・楽しい」と感じるのか。保育者の課題を「嬉しい・楽しい」へ変換するには、どのような取り組みが必要かということについて考察する。

保育の流れ ―保育者は、どのようなことを行い、どのようなことを考えている？―

まず、日々の保育の中で保育者はどのようなことを行い、どのようなことを考えているのかを図にまとめた。



保育者は様々なことを考えながら様々な実践を行っている。その実践の質は、日々の試行錯誤による経験の積み重ねや園内研究会などで保育について討議すること、研修へ参加する

ことなどによって、それぞれの保育者の中に積みあがっていく。しかし、日々の保育の中で色々と試行錯誤を行っても思うような成果に結びつかないと、保育者は自分の実践の方向性が合っているのか迷ったり、自信をもてなかったりするようになり、保育に対して前向きに取り組むことが難しくなる。

それでは、保育者はどのような時に保育の成果（子どもの育ちを実感すること）を感じ、どのようなことは難しいと感じているのだろうか。

保育者が楽しいと感ずること

子どもの成長こそが私たち保育者の喜びである。子どもと信頼関係を築き、子どもの遊びを支えたり一緒に考えたりしながらともに過ごす日々の中で、子どもの新たな一面に出会うことができた時、それは私たちの喜びとなり保育の原動力となっていく。

～あるクラスのエピソードより～

子どもたちが新しい保育室や環境に慣れ、それぞれが好きな遊びを見つけて遊ぶようになってきた。しかし、玩具を床に置いて遊んでいると、積み木やパズル、型はめなどは、他の友だちが加わってきて崩れてしまうことがあり、達成感や満足感がもちにくい姿があった。

そこで、一人ひとりの好きな遊びが充実し満足できる環境が大切だと考え、保育室の環境を再構成することにした。壁に沿って机を配置し一人で集中して遊べるようにすると、でき上がったパズルや積み木を「先生できた！見てみて！」と喜んで見せにくるようになった。また、間仕切りを可動式にし子どもの遊びに合わせて空間を仕切ることで、他の遊びが気になりにくくそれぞれの場で遊びを楽しむようになった。ままと空間では間仕切りが調理台としても活用され、子どもたちが自分の好きな場所で思い思いに遊びを楽しむ姿が見られるようになった。

毎日わずかでも時間をつくって、今どんな環境や援助が必要なのかを語り合うことが課題解決につながった。保育者同士が心を通わせながら日々の保育に取り組むことで、子どものこれまでにない新しい姿に出会うことができ、喜びに変わった瞬間であった。

また、子どもが心を開放しながら遊ぶ姿や成長していく過程を保育者同士で語り合い、気持ちを分かち合うことができた時、嬉しい気持ちはさらに膨らむ。

保育観を共有したり、「こんな活動・こんな遊びをやってみようかな」などと相談できる仲間がいたり、「それいいね」「やってみようよ」と一緒に教材研究をしたりすることは楽しく、保育の充実にもつながる。予想通りの子どもの姿が見られた時には、手ごたえや達成感を感じることができる。一緒に考えた仲間がいてその嬉しい気持ちを共有することができる。時には、予想していた子どもの姿ではない時もあるが、保育について振り返る時にも仲間がいて肯定的で客観的な捉え方ができ、保育の改善にも意欲的に取り組むことができる。

子どもの笑顔や喜ぶ姿を想像しながら、仲間と一緒に保育を立案し、実践し、また改善していく。それを繰り返す中で、信頼関係や絆も深まっていく。保育者同士の相互に理解し合える関係性が、保育をより楽しいと感じさせてくれるものとなる。

保育者が難しい（課題）と感ずること

研究の中で、保育者に「あなたは保育の流れ（図）の中で、どこが難しいと考えますか？」というアンケートを取った。その結果によると、「環境の構成・再構成」「子どもの姿に応じた援助」「ダイアリーの記入」に難しさを感じているようであった。以下に、アンケートから保育者の声を抜粋した。

<環境の構成・再構成について>

- 月齢や発達差に応じて、子どもの成長に合わせた環境づくりをするのが難しい。
- 子どもの実態を捉えて遊び環境を構成することが難しい。1つの遊びから発展していく展開や環境の再構成の仕方について学んでいきたい。
- 子どもの姿を見取って環境を構成したつもりでも、自分が予想していなかった方向に遊びが進むことも多く、子どもたちの発想に“なるほど”と教えられることも多い。
- 何を準備してあげたらよいのか分からない時がある。したいことがあっても、どのようにしたら子どもたちが分かりやすいかが難しい。
- 子どもの姿を見て整えたい環境は色々と思ひ浮かぶが、どのタイミングで？種類は？量は？と悩む。

<子どもの姿に応じた援助について>

- 自分がよいと思っているかかわりが本当にその子どものためになっているのかと悩む。
- たくさん子どもに一度に援助できないので、個と集団への援助のバランスが難しい。
- 子どもたちのやりたいにすぐに応えられず、時間が経ってからすると遊びが終息してしまっていることがある。
- 援助をする時に、保育者の方からアイデアを出しすぎたのか？子どもはそこまで求めているのか？と思うことがある。

<ダイアリーの記入について>

- 一日の流れを書いて枠がいっぱいになる。否定的なところを取りあげがちになる。
- 子どものおもしろいエピソードを記入する時には忘れていて後から思い出すことがある。メモを取るようにしたい。
- ダイアリーに何をどのように書いたらよいのか、合っているのか悩みながら書いている。

「環境の構成・再構成」や「子どもの姿に応じた援助」については、明確な正解というものはなく、保育者のアプローチに対する子どもの反応から適切であったかどうかを推察するしかない。質の高い保育実践を行うためには、例え、経験年数を経て実践を重ねてきたとしても、目の前の子どもの姿に対して、日々試行錯誤を繰り返す必要がある。「ダイアリー」は、保育改善に大変有効なものであるが、保育者が目的をもって何を記入するかをしっかりと意識していないと、「何を書いたらよいのか」「これであっているのか」と記入する意味（成果）を感じられないこともある。いずれについても、保育者は難しいと感じながらも必要なことであると感じているからこそ実践を継続しているが、いつまでも取り組みの成果が感じられないと取り組むことに意欲がもてなくなってしまう。

そこで、難しい（課題）と感じている保育実践を、どのようにすれば「嬉しい・楽しい」へと変えることができるかということについて、「ダイアリー」が保育改善に活用されている例や研究の中で実践してきた取り組みから考えていきたい。

難しい（課題）を「嬉しい・楽しい」へ変換する取り組み

○「ダイアリー」を活用して、子どもの成長が実感できる保育実践へ

保育は、一過性の現象で再現することができません。しかし、「記録を取る」ことによって、その瞬間の出来事を意識化することができます。そして、日々の遊びや生活の記録は、過去から現在へ、そして未来へと幼児の発達や学びを連続的に捉えることを可能にします。もちろん、記録は目的に応じて様々な形式があり、記録の中には幼児の姿と教師の理解や判断、それに基づいた具体的な指導が含まれています。

『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開 文部科学省 令和3年2月』より抜粋

本園の保育者は、毎日、保育を振り返って「ダイアリー」を記入している。記入する内容は、乳児は、本日のねらい・内容・一日の流れと子どもの姿・環境構成/保育者の援助・個人記録・評価/反省など、幼児は、本日のねらい・内容・主な活動・好きな遊び・学級活動・環境構成・保育者の援助・学びの芽・振り返り・反省及び考察などとなっている。項目は定められているものの、記入の仕方は保育者それぞれで、特に、保育者の予想を超えた印象深い子どもの姿や、子どもが人やものとかかわったときに表した子どもらしい感覚、保育者が嬉しいと感じた子どもの姿や困ったことなどが多く記されている。また、「ダイアリー」を書くことにより保育を省察し、翌日以降の保育の方向性を考えていることも多い。「ダイアリー」を読むことで、保育者がワクワクした瞬間や困っている様子、また遊び場の構成や遊びの展開への意気込みなどを感じることができる。

実際に「ダイアリー」に記入されていることを紹介しながら、「ダイアリー」に何を書き、どのように活用すると「嬉しい・楽しい」保育になるのか考えていきたい。

<子どもが人やものとかかわったときに表した子どもらしい感覚>

- コンビカーのハンドルの中心を押すと音が鳴ることを知ると、みんなで押して大合奏。保育者や友だちの姿をよく見ていて、真似して遊ぶ子どももいる。（0歳児）
- 順番に水を入れてもらっている。ザルだったので水が抜けてしまい、ひっくり返してみながら水が入っていないことを不思議に思っているようだった。（1歳児）
- 友だちが号泣しているのを見て、自分のお気に入りのプラスチックチェーンを探し出してきて渡していた。何かと気にかけているよう。（1歳児）
- 粘土遊び。自分から触ってみたい！となる子ども、触るのはちょっと…という子ども、興味のない子どもと様々だった。保育者も一緒に粘土を触って遊びながら、子どもたちの様子に合わせて促す。ちぎる・伸ばす・丸めるなどの動作も遊びながら確認。粘土の形を変えて見立てて遊んだり、粘土板の型に押しつけたり、こねたりはしないが積んでみたりと、おもしろい発想がいっぱいあり、保育者自身が遊び方を発見していく瞬間でもあった。（2歳児）

○子どもたちと一緒にイチヨウ・サクラの木の葉を拾って遊んでいた。㊤「葉っぱいっぱい落ちてるな～」㊤「ちょっといっぱいすぎるー!!」㊤「なんでこんなにいっぱいなんやろ」㊤「いろんな色になったからちゃう？」㊤「そうそう！色がついたら落ちてくるねん!!」㊤「葉っぱが好きな色になったら落ちてくるんちゃう？」㊤「そっかぁー。変身したら落ちてくるんやね」（3歳児）

○椅子を円に並べ「椅子取りゲームしよう」と誘い合ってスタートする。音楽を操作する子ども、椅子を減らしていく子ども、座ろうとする子どもと、ゲームは全然成立していないが楽しんでいた。（4歳児）

○収穫したパプリカからアオムシが。音楽をかけるとニョキッと出てくるので、㊤「この子（アニメ）の曲好きやで」「ダンスしてる!!」と観察を楽しんでいた。（4歳児）

○色水の色を変えようと思ったようで、ピンクのクレプ紙を1枚入れて振るが色は変わらない。㊤「なんで色変わらなかったのかな？」㊤「オレンジいっぱい入れたから！4（枚）も入れた！ピンクは1（枚）だけ」枚数によって色の濃さが違うことへの気づき。（5歳児）

○アオムシがサナギになる前の終齢虫同士が絡み合って、まるでケンカをしているような様子。㊤「アオムシも僕らと一緒にケンカすんねんなー」（5歳児）

<保育者の予想を超えた印象深い子どもの姿>

○小さいながらも、泣いている友だちによしよししたり手を握ったりする姿も見られた。（0歳児）
○友だちがお茶をこぼし自分でティッシュを取りに行行って拭いていたところ、保育者に「えらいね。自分で気づいて拭いてるの」と声をかけられたのを見て、わざとお茶をこぼし同様にティッシュで拭いていた。友だちや大人の姿をよく見ているので、思いを汲み取って認めていきたい。（1歳児）

○AがBに鞆を取られなぜか保育者ではなくCに「んー!!」と助けを求める。Cも「なにー？どうしたん？とられた？B？」とBのもとへ行き、「かーえーしーてー」と叱る。1歳児だがかかわり方を見て社会性が培われているなぁと感じた。（1歳児）

○保育者がペットボトル水鉄砲をしているのを見て、㊤「貸して」㊤「いいよ」満タンの時は上向きでも少し押せば出るが水の量が減ると出なくなる。㊤「あれ？」また満タンにする。その間に保育者が水をかける。2・3度繰り返した後、㊤「もーいいわ」ペットボトルのキャップを取って力いっぱい押す。すごい水が出る。㊤「これでいいわ！」確かに（笑）（3歳児）

○終業式。今日からしばらくの間お休みの友だちと帰りの会の前に一人ずつ握手をする。また、夏休みの登園日に会うことを約束していてウルッとした。（4歳児）

○今まで水が少しかかるだけで嫌がっていたA。今日はスケーターを洗車していると、思いがけず靴に水がかかってしまった。㊤「あー、びちょびちょになっちゃた…。もう、こうなったら、泥んこになっちゃおっかなー」と、急に気持ちが吹っ切れたようで、そのまま裸足になって遊び始めた。㊤「泥んこ楽しい。明日もしよーっと」（5歳児）

○エンドウマメの種とりを手伝ってから畑に生えているカラスノエンドウがよく遊びに登場していた。㊤「この豆、又大きくなってるやん」「めっちゃ緑やな」「茶色からは黒いのんが出てきた」「それは種やん!!」㊤「豆と種って何が違うん？」㊤「色やな」㊤「けど同じ草やで？」㊤「おかしいな？」一振り返りの時間にー㊤「豆と種って何が違う？」㊤「色、大きさ」「赤

ちゃんが黒で大きいのは緑」「でも、緑の（さや）が枯れて茶色が種やから、赤ちゃんの方は緑やん」「干しシイタケかな？」（乾燥して小さくなるイメージ？）－食後－㊥「豆の本見つけたから読んでみるわ」…「同じってことみたい」「食べられるん？」「給食の先生しか分からんからきいてくるわ」しばらくして㊥「分かったで。すごいわ」㊦「じゃあ、帰りの会でみんなに知らせて」－帰りの会にて－㊥「カラスノエンドウは食べられるんやって」「サラダにしても美味しいって」「じゃあ、給食の先生がやってくれるかきいてみよう」

※朝見つけると昼からもずっとこの草が気になる子どもが多く、テラスで豆をとったり畑へ行ったりと、主体的に好奇心・不思議さを楽しんでいた。（5歳児）

＜保育者が嬉しいと感じた子どもの姿＞

○朝、キーボードを出してくると嬉しそうに集まってくる子どもがいた。毎日繰り返す中で、楽しみになっているように感じた。（0歳児）

○Aちゃんのイヤイヤ対応記録 イヤイヤ度が増し切り替えできるような援助をと「今から手を洗うからタオルで拭いて椅子に座ってね」と事前に約束すると「分かった」と来てくれることに気づく。その日、「エプロンをなおしたら布団にきてね」と約束し、久しぶりにコットへ来たので「やったー」（心の声）と思ったのも束の間「ゴロンはしないよ」とのこと「しまった、そこまで約束していなかった」まだまだ試行錯誤中。（1歳児）

○（飼育ケースにいるバッタを観察中）飼育ケースを登っていく姿に㊤「上手やなあ」㊦「なんで滑らんのかなあ」と興味津々。すると後ろ足が1本折れていることに気づく。㊧「みんなが揺らすから折れたんちゃう？」㊨「もうママに会いたいかなあ」とバッタを帰すことに。園庭の草があるところを探していると大きなバッタが登場。㊩「あっ、パパが会いに来たわ」いなくなると「バイバイ」と手を振っていた。㊪「ママいなかったねー」と少し寂しそう。散歩で生き物（虫）と触れ合えたことで、子どもたちの気持ちがいろんな方向へ揺れ動かされたように思う。（2歳児）

○塗り絵は白いところがなくなるまで頑張ろうと伝えていて、保育者からその都度声をかけることが多かったのだが、Aが周りの子どもの様子を見て「あっ、まだ塗れるところあるで!!」㊫「ああ、ほんまや。ありがとう」㊬「紙もったいないし、いっぱい塗ろうな～」と、まるで保育者のように話す姿がおもしろいのと同時に自分たちで声をかけ合いながら遊んでいる姿に成長を感じた。（3歳児）

○学年でかけっこをした。自然と友だちが走っている姿を見て「頑張れー」と応援していた。普段親しみをもってかかわっている友だちだから、自然と応援する姿につながったのだと思う。（3歳児）

○昨日欠席で製作をしていなかった子どもに保育者が誘いかけると、㊭「Aが教えてあげる」と必要なものを準備してあげていた。BとCも先生になっていた。また、友だちが泣いていると「どうしたん？」と声をかけたり「先生、〇〇と△△がケンカしてるで」と知らせに来てくれたりする。友だちに優しくかかわれるようになってきていると感じる。（4歳児）

○振り返りの時間に。㊮「バッタとカマキリを捕まえて嬉しかった」㊯「まだいるの？」㊰「小さかったから逃がしてん」「もっと大きくなってほしいから」（5歳児）

＜困ったこと＞

- ダンゴムシ用につくった迷路がプラスチックで滑りやすくダンゴムシがうまく歩けない。土を敷いてみると迷路をしっかりと歩けて、見るのがおもしろくなるかもしれない。(後日) 迷路に砂を入れるとダンゴムシが歩きやすくなったので、多くの子どもが長時間見ていた。(1歳児)
- 保育室から飛び出してしまう子ども。保育室の遊び環境に飽きてしまっているのではないかと感じている。本児の楽しめる遊び環境を用意していきたい。(後日) 本児が好きな車遊びのスペースをつくった。ままごとコーナーにはドーナツや果物などのフェルトの食べ物を用意した。保育室の遊び環境を見直したことで、廊下への飛び出しが減ってきている。(2歳児)
- 保育者が水遊びに向かおうとすると「先生、(水遊びに)行ったらあかん」と言っていたAだが、保育者が遊んでいると「Aちゃんもする…」と参加するようになった。(3歳児)
- よく、誰が1番に遊びに来たかどっちが先かとトラブルになる。㊤「こんな時どうしようか」と問いかける。㊦「どうぞってする」と譲と言う。㊧「どうぞしてもらったらどんな気持ち？」㊨「嬉しい気持ち」「いい気持ち」すぐに解決はしないが、1つずつみんなで考える機会をつくっていいと思う。(4歳児)
- ペットボトルをセロハンテープでつなげてロケットをつくっていたので、たらいに水を溜めて遊べるようにした。「浮かぶかなあ。たぶん大丈夫と思うねんけど…」と恐る恐る浮かべてみたA。浮かべることに成功して「よかったわー」と安堵した様子だったが、段々セロハンテープがふやけてペットボトルがバラバラに。それを見たB「セロハンテープはベトベトが弱いからふやけたんちゃう？しかも細いし。ガムテープにしたらいけるんちゃうん？」とアドバイス。その後、ガムテープで貼り直し浮かべてみると、長い間浮かべていてもバラバラにならなかった。※実験してみないと気づけないということへの気づき。この発見を振り返りの時間にみんなに伝えてアドバイスしていた。㊩「みんなもガムテープにした方がいいで！」(5歳児)
- 保育室で飼育している虫の観察。虫へのかかわり方が自分本位である。飼育環境としてよいのかの判断と、触りたいという思いのせめぎ合い。そこからトラブル、言い合い。「水をあげすぎ」「バッタを死なそうとしている」「違うし」と、言いたいことだけを大声で言うので、きける状態ではない。※一度虫コーナーを片づけて、虫にとっての嬉しい・気持ちよいは何かを考える。今日は答えが出そうになかったので、保育者主導で「1回、虫さんを安心させてあげてね」と話し合いを終えた。明日以降どういう姿が見られるか。(5歳児)

＜遊びの展開のヒントや考察＞

- 水遊び用の水に色をつけてみた。色がついていることで、水の動きが分かりやすくおもしろい様子。(後日) ウォータージャグに色水を入れたらおもしろいかも？と思ったので、準備して台の上に置いておく。青の色水が入ったコップに、ジャグから黄色い色水を入れるときれいな緑に！保育者が「きれいな緑になったね」と言うとうじっと見ていた。(1歳児)
- ままごとコーナーのシンクにフェルトの食材を全部入れて、トングで混ぜる。鉄板で何かを焼いているイメージ？(後日) ホットプレートをつくってみると早速焼き始めた。トングを上手に使い、具材を取ったり炒めるようにしたりとリアルな感じで遊び始めている。シンクに具材を入れることはなくなった。(1歳児)

○登園時Aが姉のお弁当の話をしていたことから（遠足？）、ままごとでお弁当をつくり、テラスにバスタオルを広げピクニックごっこをする。「鞆にこれを入れて…」と用意をする様子もとても楽しそうで、並んで座っている光景が微笑ましかった。（2歳児）

○画用紙をクルクルと丸め輪っか状にする。それをセロハンテープで止めてドーナツに。少し難しいかと思っていたが子どもたちは集中して楽しんでた。テープを切ることをあきらめずに挑戦する姿も。今後はシールや絵の具などでトッピングする遊びもしたい。衣装があるとなりきれるだろう。エプロンやサンバイザーも検討！ドーナツを入れる袋やトングもつくりたい！（3歳児）

○子どもの様子を見ていると、友だちの遊んでいるところに何をしているのかと様子を見に行き、そのまま一緒に遊ぶということが多い。ごっこ遊びを楽しめるかも。（3歳児）

○昨日アオムシを見つけたので、観察しつつ遊びにも取り入れられたらと思いチョウをつくった。模様をかいたチョウを背負えるようにすると興味が湧いた子どもも多く、やりたい！とつくり始めた。今日は外へ飛んで行けなかったが、天気の良い日は外でも飛んでみようと思う。（3歳児）

○遠足の日の夕方、遠足ごっこをして遊んでいたのも、紙袋でつくったリュックを準備しておいた。早速リュックを背負って遊ぶ。「ランドセルみたい」と学校ごっこをしている子どもたちもいた。振り返りの時間に「他の人も使っていいよ」と子どもたちが知らせると、午前中は違う遊びをしていた子どもたちが、段ボールの囲いをバスに見立ててリュックを背負って遊んでいた。（4歳児）

○園内研究会で、何を準備しておくかで子どもの遊びがかわっていくという話し合いになった。準備物は大切だと、改めて感じた。（4歳児）

○マーブリング。先に保育者がやっていると「何してるの？」「やりたい」と興味をもっていた。液を1滴ずつ垂らす度に広がるので、「おお！」「すごい！」と言い完成すると「きれい」と喜んでた。間違えた・失敗したが無いので取り組みやすかったように思う。（4歳児）

○5歳児の鬼のお面を違うバージョンでつくることに昨日からはまっている。ただ、段ボールが硬くてはさみで切れないので、子どもでも切れてしっかりしている素材を使ってつくれるようにしたい。厚紙・空き箱を開いて試してみよう。（4歳児）

○画用紙とペットボトルの蓋で車をつくっている。しかし、パズルブロックでつくった車のようにタイヤが回らないことに気づき。④「ここ（のタイヤ）が回るようにしたいねんー。どうしたらいいんやろ…？」⑤「蓋にテープがくっついているから回らないよね」⑥「でもテープくっつけないとつかへんし…」⑦「じゃあ蓋にテープつけなくてもくっつくように棒を通してみる？」蓋に穴を開けてつまようじを通す。⑧「すごいなあ。これで回るな。でもちょっとちっちゃい（短い）…」竹串くらいの長さがあればよかったが準備がなく、明日用意してもう一度挑戦しようと思う。（5歳児）

○（特別保育を振り返って、）1か月、みんなでイメージを出し合い、共有し、遊びをつくることで、クラス（学年）で一緒に遊ぶ楽しさも味わえたと思う。これを次のステップとして、友だち同士一緒に遊んだり年下の友だちと遊んだりした経験を2学期にもつなげていきたい。また、子どもたちから特別保育にかかわってくださった職員の皆さんに、感謝（ありがとう）を伝えられる方法を考えたい。（5歳児）

＜子どもが人やものとかかわったときに表した子どもらしい感覚＞には、〇歳児なりの見方・考え方が具体的なエピソードとして記されている。また、＜保育者の予想を超えた印象深い子どもの姿＞からは子どもの育ちや可能性を見出すことができる。保育の中でこのような姿を発見した時、保育者はこの姿を誰かに伝えたいと感ずることが多い。エピソードを楽しむように語る保育者はとても生き生きとしている。保育者同士が伝え合うことで、それぞれの子どもたちが物事をどのように捉えどのように表現しているのかを巧みにキャッチする保育者の感性が培われていく。＜保育者が嬉しいと感じた子どもの姿＞には、生活や遊びの自立や思いやる姿など、日々の援助の積み重ねによって子どもたちが成長したと実感できるエピソードが記されている。保育者にとって嬉しい瞬間である。＜困ったこと＞には、保育をされていてうまくいかないと感じたことについて、その原因を推察し、手立てを考え、後日実践をしてみてどうだったかが書かれていることが多い。年齢が上がるにつれて子どもが保育者と一緒に手立てを考えたり、子ども同士で試行錯誤したりすることも増えてくる。＜遊びの展開のヒントや考察＞には、保育者の働きかけに対する子どもの反応や遊びの中で子どもたちが興味をもった姿を捉えて、保育者が保育をどのように展開していきたいと考えたかが記されている。「子どもが～ので、〇〇を準備してみようと思う」などと前日のダイアリーに書かれていると、翌日には準備した環境に対する子どもの反応が書かれていることが多い。また、記録を取り続けているからこそ意識できる、子どもの成長や友だちとのつながり、過去の経験を活用して遊ぶ姿などについての考察が記入されていることもある。どのような経験が現在の子どもの姿につながっているか、個々の子どもの姿が何とどのようにつながりクラス全体の雰囲気として表れているのかなど、一旦立ち止まって保育を俯瞰し論理的に考えることで、今後の援助の方向性やクラスづくりの方針を確認する機会となる。

これらの「ダイアリー」への記録は、＜子どもの姿に応じた援助＞のアンケート項目で“たくさんの子どもの一度に援助できないので、個と集団への援助のバランスが難しい”という悩みに対しての答えとなり得る。日々、一人ひとりの様子やクラスの遊びの展開を記入していると、ここぞという援助のタイミングがなんとなく分かってくる。さらに、試行錯誤しながら保育改善を行い実践したことの成果が子どもの姿となって表れることで、保育者が「嬉しい・楽しい」と感ずることも増え、より意欲的に保育に向かい保育の質の向上にもつながる。

〇保育を支える保育者集団

保育は担任を中心に展開されるが、担任以外の保育者や園内の様々な職員が子どもたちとかかわっている。また、直接的な援助は担任が行ったとしても、子どもの様子を話し合ったり保育を振り返ったりすることを、複数の保育者で行うことも多い。園全体で保育に取り組むことで「嬉しい・楽しい」保育実践が増え、保育の質も向上していく。

子どもの姿を見取るためには、どの部分にフォーカスするのがよいか。同じ遊び、同じ子どもの様子を見ても保育者の感覚によって受けとめ方が変わってくる。それは、子どもの行動を同じ角度や同じ価値観で見えてしまいがちになるのが一因である。しかし、見取りに偏りが生じると、援助にも偏りが生じる可能性がある。それでは、子どもを肯定的に見取り一人ひとりに応じた適切な援助を行うために、保育者は自分自身の力量をどのように磨いて

いけばよいのだろうか。

研究の様々な場面では、保育者同士が保育観や悩みを共有したり一緒に教材研究をしたりしながら、子どもたちの伸び伸びと遊ぶ姿や成長を分かち合い喜び合える関係性を築いてきた。この関係性も、保育者の力量を支える重要なものである。ここでは、具体的にどのような場面で、どのような語り合いが行われてきたのか紹介しながら、保育者集団がどのように機能することで、保育者一人ひとりの力量形成につながるのかを考えていきたい。

<園内研究会の取り組み>

園内研究会では、指導案の立案前に、担任、同じ学年の担任、主幹保育教諭、園長などで話をする時間をもつ。ここでは、「クラスの様子」「どんな遊びが展開されているか」「悩み、気になること」「担任の願い」「当日の保育の展開」などについて対話をしながら、クラスの実態を俯瞰して見つめ直している。

指導案検討会議には、担任、希望する参加者、主幹保育教諭、園長などが参加し、担任が「クラスの様子・当日の環境・どんな遊びを展開しようと思っているか」などについて話をする。参加者は、「遊びのきっかけ、流れ、なぜその遊びが盛り上がっているのか、どこにどんな遊びが展開されるのか」などの質問を交えながらきいていく。また、参加者のクラスの様子や遊びについても話したり昨年度の担任からその当時の子どもの姿をきいたりすると、発達のつながりや他学年の子どもとの興味の違いなどが感じられる話し合いとなっている。これまでの検討会議では、担任は自分の保育を語ることに「何か指摘されるかな」「この環境でよいのかな」など身構えてしまうような雰囲気があったが、事前の話し合いでクラスの様子や当日の遊びの展開について一度整理して指導案を立てているので、当日の保育について「きいてもらいたい」という気持ちで臨むことができるようになった。また、参加者から「この遊びが楽しそう」「当日どんな反応が見られるのか楽しみ」と認められることで自信をもつこともできた。さらに、環境の整え方に悩んでいたり何かよい素材はないかと考えていたりすることに対しては、「以前こんな方法でやったことがある」「この場合は、動線が近くでいいのでは」と手立てのヒントを出し合う姿も見られた。検討会議の場が「私の保育をみんなで考える時間」となり、様々な経験をもつ保育者からの意見や見取りをきくことで考える幅を広げながら「当日の保育のイメージをつくり上げていく」ことができた。みんなで意見を出し合い保育を充実させていく、そんな時間となっている。

<事例研究会の取り組み>

事例研究会では、事例シートを作成する際に、事例提案者（担任）、同じ学年の担任、主幹保育教諭、園長などで事例について話し合う。「どんな写真を」「なぜ選んだのか」「この遊びのきっかけは」と話を進め、対話の中で実践を【大切にしている3つの視点】に整理していった。提案者は、「自分がどのような見取りからどのような援助をしてきたのか」「子どもはその後何を思ったのか、感じたのか」といった視点で実践を振り返り事例研究シートを作成する。事例研究会当日は、事例シートをもとに参加した保育者との対話の中で「子どもが何を感じたのか」「保育者はどう援助したのか」「その援助はどのような育ちにつながったのか」について考え合う。同じ考えであったり別の捉え方があったりするが、参加者同士で対話を深め

ながら考察し、最終的にどのような見取りからどのような援助を行ったことが子どものどのような姿に結びついたのかという「一つの結論」を導き出してきた。

例えば、3歳児の事例では、保育者が虫への興味を捉え常に観察できる環境を整えたり、虫との触れ合い方を伝えていくことで、子どもが虫への興味を広げたり飼い方を考えたりする姿へつながっていった。保育者が一つ一つねらいをもって環境をつくり援助していくことで子どもの探求心を育むことにつながったことが、討議を通して捉えられた。

事例研究シートを用いて研究を進めていくことで、事例提案者は遊びや経験を継続的に捉えることができ、参加者は遊びのどの場面を捉えることが必要なのか、どのような環境や援助が子どもの興味・関心を惹きつけたり、引き出したりできるのか、自分ならどのような展開をするのかという視点で討議に参加することができた。討議のゴールは「保育者が〇〇することで子どもの〇〇が育った」と、保育者の援助が子どものどのような力を育むのか、保育の成果を確かめることである。

＜カリキュラム会議の取り組み＞

毎月実施しているカリキュラム会議では、各学年・クラスの様子を伝え合っている。

9月の会議にて、5歳児の担任から、「リレーをやりたくないという子どもがいる。運動遊びが嫌いな子どもではないので運動会をプレッシャーに感じているのかと思う。リレーの列に並ぼうとしないので無理強いせず様子を見守っている」という話が出された。その話をきいて、以前にクラスカバーに入った保育教諭（3歳児の時の担任）がリレーの様子を見ていた時に、友だちとの関係の中で「リレーで負けた時に自分のせいで負けたといわれるのが嫌で走りたがらないのではないか」と感じたことを担任に伝えた。担任は子どもの気持ちを受けとめ、負けても誰かのせいすることがないようなクラス運営に努めた。不安が払拭されたことで、やがて力いっぱいリレーを楽しむようになった。

悩んでいることや気になっていることを伝えたことで、他の保育者も自分のことのように一緒に考えることができた。また、それぞれのもつ情報をすり合わせることでよりの確な見取りが適切な支援へつながった。保育者同士が互いの保育を語り合いながら、自分ならどう考えるのかどのように援助するのかを問うことが大切である。また、一人ひとりの子どもを担当だけでなく園全体で見守り育てるという、温かな園組織づくりが保育の質の向上には不可欠である。

3. 研究のおわりに

本園の保育者たちは、平成29・30年度「認定こども園に向けての教育・保育の研究」、令和元・2年度「幼児教育研究 園環境を活用した、新たな生活や遊びの創造～子どもと保育者が輝くこども園～」、令和3・4年度「幼児教育研究 未来につなぐ！わかばのポケット～夢があふれるこども園～」と、6年間に渡り研究に取り組んできた。

それぞれの研究では、その時々の子どもたちの実態に合わせた研究テーマを設定して実践を積み重ねてきた。研究テーマと研究方法を保育者一人ひとりが意識することで、職員が同じ方向を向いて実践を積み重ねていくことができた。また、おのずと話す機会も増え、保育を一緒に振り返ってもらって自分の保育が間違っていなかったと安心できたり、課題が明確

になり次に取り組むべきことがよく分かったりした。同じ方向を向いて実践をしているので悩みや課題が同じこともあり、保育者同士がオープンに保育について話をする園の雰囲気も生まれているように感じる。保育者一人ひとりが、毎日、保育をどのようにすればよりよくなるかと考えることが習慣のように身についてきて、環境や手立ての改善にも失敗を恐れることなくチャレンジしようと意欲的に取り組んでいる。

最も大切にしていることは、子どもの気持ちに寄り添い、子どもたちが好きなことを伸び伸びと楽しむことができる保育の実践である。たくさん話し合いの中で、遊びのバリエーションや保育者一人ひとりの保育の幅も広がってきている。近頃は、子育て支援事業で本園を利用してくださっている保護者の方から、子どもを本園に入園させたいといった嬉しいお声をきくことも増えた。在園児の保護者から、保育者の子どもたちに対するかかわりが温かく、子どもの興味に合わせて色々な遊びを経験させてくれるときいているからだそうだ。

2年間の研究は一区切りとなるが、研究の中で培ってきた保育者の専門性を、これからも日々の保育の中で磨き続け、子どもたち一人ひとりが生き生きと自己を発揮しながら楽しく園生活が送れるように、取り組みを継続させていきたい。



令和3・4年度 幼児教育研究

未来につながれ！わかばのポケット
～夢があふれるこども園～

< 2年次 研究報告 >

八尾市立東山本わかばこども園

令和5年2月 発行 (R4-153)

【発行】 八尾市
八尾市教育委員会
〒581-0003 八尾市本町一丁目1-1
【TEL】 072-991-3881 (代表)

